
quartet

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

quartet

【Nコード】

N0801L

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

スーパーセレブな学園に通う、4人の金持ち高校生。
贅沢三昧の日々を送っているが、実はそれぞれ胸に秘めた片思いをしている。

4人とも想いを成就させるべく、頑張るのだが・・・

第1話 萌加 「アイツ」

私は学食の席につくと、大急ぎでランチを食べ始めた。
量も少なくしているので、あっという間にお皿の底が見えてくる。

「萌加^{もか}は相変わらず早食いだな」

私の前の席で優雅にフォークでパスタを巻いているのは、ひがしはらうしゅんせい東原龍聖。
どんなタイプの男かと言えば、まさに王子様。
白タイツをはかせてみたい。

「生まれつきなんだからほっというて」

私はお皿から目を離さずに言った、
が、ついでにチラッと左腕の時計を見る。

12時30分。

お昼休みが始まって、まだ15分。

ううん、もう15分！

急がないと！

だけど私は急いでいる素振りは見せず、いかにも「生まれつき早食
いなんです」って感じで食事を進めた。

「うわ。萌加、もう食べ終わっちゃうじゃない！」
「もつとゆっくり食えよ。身体に悪いぞ？」

のんびりとやってきたのは、寺脇ナツミと村山健次郎。
ナツミが私の横に、健次郎が龍聖の横に座る。

これがいつものメンバーだ。

4人が揃うと、あちこちから視線を感じる。

「ほら、あの金持ち4人組だ」

「なんかまた良からぬことを考えてるんじゃないの？」

「お高くとまりやがって」

みたいな視線。

どうでもいいけど、そんな視線を送っているあなた達もじゅうぶん
お金持ちでしょ。

お互い様よ。

私を通う私立堀西学園は日本でも有数のセレブ学園。

小学校から短大・大学まで一貫で、受験なんて庶民のイベントは当然
ない。

（一応あるけど、本当に一応。受けなくても進学できるんだから）

東京の一等地に広い敷地を持っていて、その中に初等部・中等部・
高等部・短大・大学の校舎がある。

しかもそれぞれに運動場や体育館、学食なんかも持っている。

後、ホテル並みの学生寮とか、図書館並みの図書室とか。

まあとにかくそんな学園に通っている生徒達は、例外なくお金持ち
ばかり。

ただ、私達4人はその中でも「特に」お金持ちであるのは事実。

東原龍聖の家は、日本一大きな銀行。

寺脇ナツミの家は、寺脇コンツェルンという大財閥。

村山健次郎の家は、ホテル王。

そして私、かくいなかもか神楽坂萌加の父は・・・神楽坂財務大臣だ。

健次郎のところは成金という感を否めないけど、4人の家が保有する資産に大差はない。

そのせいか、初等部時代から私達4人は何かと話が合い、なんとなく一緒にいる。

そしていつの間にやら4人とも、もう高校1年だ。

だけど、決して「仲良し4人組」じゃない。

例えば私の家が破産すれば、3人はたちまち私から離れていくだろう。

私だって同じだ。

ナツミは、その性格と同じくらいのんびりとした速度でお箸を取った。

と、同時に私はお箸を置いた。

「萌加って、昔はもつとゆっくり食べてた気がするんだけど・・・」

ちよっとたれ目で全体的に「ほんわか」したナツミ。

そのくせ、観察力はあるんだから。

「そう？昔から早かったわよ？」

私はサラッと誤魔化して、席を立った。

「今日も餌付け？」

健次郎が面白くなさそうに言う。

「そうよ。どうせ暇だし」

私はまたサラッと答え、学食の出口の方へ向かった。

学食といっても、これもそんじょそこらの学食とは訳が違う。

（他の学食なんて知らないけど）

高級レストランのシェフ達が、ちゃんと目の前で料理してくれるのだ。

そして食べ終わったら無人レジにお盆を置き、学生証をかざすと「ピッ」と支払いが済む。

お皿の裏に磁気が付いていて、コンピューターがそれで金額を計算しているのだ。

請求は翌月に、学費と一緒に親のところへ行く。

その額が一体いくら位なのか、想像つかないけど。

私はこの学食が好きだった。

好きな物を好きなだけ食べられるし、なかなか美味しい。

目の前で調理してもらえると、言っのもなんだか嬉しかった。

でも今は、その時間さえ惜しい。

一番早くできるメニューを注文し、大急ぎで食べて、大急ぎでレジへ向かう。

もちろん、そんな素振りは見せずに。

私は学生証で支払いを済ますと、学食の出口へ・・・は、向かわず、再びシェフ達が料理を出すエリアへと戻った。

「小原さん。今日もお願いね」

私はすっかり顔なじみになった、シェフの小原さんに声をかける。

小原さんは高級料亭から出向いてきている、シェフというか、料理人だ。

「はい。今日はいいいお魚が入ってますからね。簡単なお造りと、茶碗蒸し、後炊き込みご飯でどうですか？」

「お任せするわ」

「かしこまりました」

小原さんは手際良く料理を作り、折り詰めに入れていく。

もうちょっと早い時間だと、まだ学生がいっぱいで小原さんも手が空いていない。

でも、もうちょっと遅い時間だと間に合わない。

ううん、間に合わなくはないけど、少しでも早く持って行きたい。

小原さんは私が急いでいるのを知っているから、超特急で作ってく

れる。

量も心得ているから、多すぎず少なすぎず、無駄がない。

それに私の目的も知っているから、わざと「余り物を詰めました」的な折り詰めにしてくれるのだ。

私がこの仕事を小原さんに頼むのは、料理の腕と、この気遣いがあるから。

そして・・・アイツが和食好きだから。

「どうぞ」

「ありがと。いつも悪いわね」

「いいえ」

私は財布からお札を多めに取り出し、小原さんに渡した。

でも小原さんはそれを半分受け取り「もう半分は、明日頂ます」と笑顔で言ってくれた。

本当にありがたい。

私は欲しい物がある時は、いつも持ち歩いている親のカードで買うし、

この学食の支払いは学生証で行うから、

普段、現金と言う物をほとんど持っていない。

それは、龍聖達も同じ。

だけどこの折り詰めは、ここのお皿のように磁気は付いていないから「ピッ」と言う訳にいかない。

第一、こんな風に折り詰めを作ってもらうなんて、例外中の例外だ。私が「神楽坂萌加」だから、特別に先生も目を瞑っている。

だから、小原さんへの支払いも現金。

小原さんは材料代しか取らないけど、それでも私には毎日この現金を用意するのは大変だ。

実際、どうしているのかというと・・・

うちのお手伝いさんから、現金をもらっているのだ。

そしてお父さんになんだかんだ理由をつけて、そのお手伝いさんに「特別手当」を支払ってもらっている。

コレを始めてから、お金のありがたみというのを心底感じる事ができた。

私は折り詰めをそつと抱えると、学食から走って飛び出した。

第2話 龍聖 「彼女」

「毎日毎日、よくやるよなー」

健次郎がため息をついた。

でもそれは嫉妬から来るため息ではなく、本当に呆れている、という感じだ。

いや、呆れられるのはお前の方だから。

鈍いったらありやしない。

でも俺は、わざわざ健次郎の機嫌を損ねる必要もないと思い、適当に「ほんとだな」と、相槌を打った。

だってこいつ、キレたらちよっとヤバイ。

それなのに、健次郎に負けず劣らず鈍いナツミが首を傾げて言った。

「でも、萌加、どうして『餌付け』なんてしてるんだろ？」

「そりゃアイツを、自分のペット、つか、便利屋にしておくためだろ」

健次郎が鼻を鳴らした。

おいおい、本気でそう思ってるのかよ。

「そう？でも、萌加がアノ子に命令してるのとか聞いたことないなあ」

そりゃそうだ。

「コイツは私のペットよ」みたいな雰囲気わざと振り撒いてはいるけどな。

だけど相変わらず鈍い健次郎は「そーかあ？」とか言ってる。

村山健次郎は、堀西の中でもちょっと特殊な存在だ。

親がホテル王・・・正確にはラブホテル王だから、つてのが大きな理由。

早い話が、ちよつとヤクザな家なのだ。

いや、家自体は立派に普通の大金持ちだけど、親父さんの仕事上、ヤクザなんかと関係があつたりするらしい。

「由緒正しい」の手本みたいな俺の親からみたら、健次郎の家はかなり野蛮だろう。

だけど、俺はなんだかんだ健次郎といることが多い。

バカだし鈍いし、どうしようもない奴だけど、

自分と違うタイプ過ぎて、見ていて面白い。

口さえ開かなきゃ、見た目はそこそこいいんだけどな。

もう一方の鈍いお嬢様・寺脇ナツミは、それこそうちの親も「これは、これは」

と頭を下げるほどの「由緒正しい」お嬢様。

それも、神楽坂萌加みたいな高飛車なお嬢様じゃなくて、正真正銘の箱入り娘だ。

世間を知らなさ過ぎるって言うか、純粹過ぎるって言うか。

まあ、俺から見ればナツミも健次郎同様「バカ」の部類に入る。そついう意味じゃ、萌加は頭がいい。いや、計算高い。

例の「餌付け」を見ていてもわかる。

だけど、さすがの萌加もこればかりは相手が悪い。

一見、萌加が主導権を握っているようで、実はアイツが萌加を操っているんだと思う。

萌加もそれに気づいているだろうけど・・・ま、惚れた弱みってやつだな。

って、俺も人のことは言えない。

「ねえ、そういえば、龍聖は彼女とどうなの？」

「・・・」

ほらきた。

ナツミって、ボケボケしてるくせに、たまにこうやって鋭いこと言ってくるんだよな。

でも俺はいつも通りの「王子様スマイル」（萌加がそう呼んでいる）で答える。

「ああ、うまく行ってるよ」

「さすが、龍聖だな。5歳も年上なんだろ？えーっと、今、大学2年生？」

「3年生だ」

「あ、そっか」

足し算くらい頑張れよ、健次郎。

「でも龍聖はかっこいいから、彼女も龍聖に夢中なんだろうね」

ナツミがまた無邪気にドキッとすることを言ってくる。

夢中？彼女が？俺に？

そんな訳ないだろ。

夢中なのは俺の方だ。

彼女にとっては俺なんて、コレクションの一つに過ぎない。

だけどやっぱり俺は相変わらずの笑顔で「もちろん」と答えた。

ちょうどその時、彼女からメールが来た。

俺は一応二人に断ってから携帯を開く。

別に何も言わずに携帯いじったっていいんだけど、

こういうことをきちんとしないと、俺はなんか嫌なんだ。

「今日、会える？」

会える？だつて？

もちろん！

俺が彼女からの呼び出しを断ったことなんて、一度だつてない！

彼女だつてわかってるくせに、「会いましょ」「じゃなくつて「会える？」とメールしてくる。

彼女の本心は俺も知ってるのに・・・

それでも彼女のこんなところをかわいいと思ってしまう、

心底喜んで「会えるよ」と返信してしまう俺。

ほんと、萌加のことは言えないよな。

第3話 萌加 「餌付け」

廊下の途中で私は足を止めた。

これも毎日の習慣。

1年A組の手前にトイレがある。

食べ物を持っているからさすがに中に入るのは気が引けるけど、トイレの外から、鏡に映った自分をチェックする。

ナツミとは対照的に、ちょっと目じりが上がった大きな目は、自分でもなかなか魅力的だと思う。

よく龍聖に「男を誘う目だ」って言われる。

あの遊び人がそう言うんだから間違いないんだろう。

髪は・・・黒くて長いストレート。

走ってきたからほつれてるかな？

慌てて手櫛を通す。

これも、龍聖によく「意外だ」って言われる。

私みたいなタイプは茶髪のユル巻きが常識、らしい。

私もそう思うし、そうしたい。

だけど、小学校の頃アイツが私に「神楽坂って綺麗な髪してるよな」って言うてくれたことがある。

それ以来、私はずっとこの髪型だ。

もう一度鏡を見る。

髪、よし！

制服、よし！

化粧、よし！

頬がちょっと赤いのは・・・走ってきたせい、だけじゃないだろう。

これは仕方がない。

最後に腕時計を見る。

12時45分。

うわ。お昼休み、後30分しかない。

早く行こう！

私は息を整えて、1年A組の扉を開いた。

「本城」

「ん？ああ、神楽坂」

本城は机から顔を上げて私を見た。
笑顔でもなんでもない。
普通の顔。

だけど、ドキツとする。

でもやっぱりそんなことは隠したまま。

「何してたの？」

「勉強」

「真面目ね。勉強なんてしなくたっていいのに」

「他にすることないし」

本城は友達がたくさんいるけど、いつも教室で一人、ランチを食べ
ている。

ランチ、なんて洒落たもんじゃない。

購買でお菓子みたいに売っているコロッケパンを一つ食べるだけだ。

だからすぐに食べ終わって、友達が学食から帰ってくるまでこうや
って勉強している。

いくら他にすることないからって、どうして勉強なのよ？

私だったら、寝るか携帯でテレビでも見てるに違いない。

そう思って、一度本城に「テレビでも見ればいいのに」って言った
ら、

「俺、携帯持ってない」と返された。

思わず、「じゃあ私があげるよ」と言いそうになった。

そうしたら、自然とお互いの番号を交換できそうじゃない？

「ほら。あげる」

私は無造作に折り詰めを本城の机の上に置いた。

「お、いつもありがとな」

「・・・別に。私、食べるの早いから、どうせ暇だし」

本城は早速折り詰めを開き「うまそう！」とか言いながら、嬉しそうに食べ始めた。

私は本城の隣の席に腰を下ろし、そんな本城を見つめた。

本当に美味しそうに食べるんだから。

いかにも男の子って感じで、大きな口でパクパクと。

でも、それでいて「むさぼってる」って感じじゃないのよね。ちゃんとマナーは守ってる。

本城は空手部で、朝も練習してるし放課後だって部活がある。ランチがクロッケパン１つなんて足りる訳ない。

だから私がこうやって、「暇だしお金なんていくらでもあるし」と言って、

毎日折り詰めを本城に持ってきている。

本城の家は、もちろんお金持ちだけど、堀西の中じゃ「中の下」だ。それでも、昔は普通にお小遣いをいっぱい持ってたし、

毎日学食でいっぱいご飯を食べてた。

私はいつも例の３人と一緒だから、見てるだけだったけど。

それが、中学２年生のある日、本城は突然学食に来なくなった。噂だと、本城が親と喧嘩して家を出て、知り合いの家でお世話になり始めた、らしい。

滅茶苦茶高い堀西の学費もその知り合いの家から出してもらっているらしく、

さすがに学食代まで負担してもらうのが悪いのか、それ以来本城のランチはパンだけだ。

そんな本城を見て、私はここぞとばかりにこの折り詰めを始めた。それまで本城と話したことなんてほとんどなかったけど、これのお陰で、少しだけ毎日二人で話ができるし、本城も喜んでくれる。

この習慣が始まって、もう2年近くが経つ。

健次郎には「本城の餌付け、高校生になったんだしいい加減やめたら?」と馬鹿にされたけど、やめるつもりは全くない。

「すげー。刺身が入ってる」

「美味しい?」

「うん。美味しい」

「・・・」

「何?」

「うっん。明日は何がいい?」

「なんでもいいよ。食べられるだけでありがたい」

「・・・うん」

本城は凄くかつこいい。

本城には10個くらい上にお兄さんがいて、もうとっくに大学も卒業してるけど、

その人は堀西学園の中でも外でもちよつと有名くらいかつこよか

った。

そんじょそこらのモデルなんて目じゃないくらいに。

確かに顔だけなら、本城より本城のお兄さんの方がカッコいいかもしれない。

でも、私には本城以上はない。

本城も、私がそう思ってるのをたぶん知ってる。

だから、こうやって折り詰めを持ってきたも、「ありがとう」とは言うけど、

「悪いな」とは言わない。

これが私の楽しみだってわかってるから。

だけど、女の子に毎日毎日折り詰めなんか持って来られて、実は恥ずかしいのかな？

でも「やめてほしい」とも言わない。

単にお腹いっぱいになるのが嬉しいから？

それとも・・・

「あ」

「どうしたの？」

「三色団子が入ってる。花見の季節だからかなー？」

本城が楽しそうに、あはは、と笑った。

・・・やっぱり、この「餌付け」、やめるつもりはない。
大学生になっても続けたい。

ううん、それから先もずっと続けたい。

「餌付け」されてるのは、私の方だ。

第4話 健次郎 「変態」

あーあ。面白くない。

俺は手を頭の後ろで組み、
椅子をギシギシと揺らした。

授業中の国語教師が嫌そうな顔をして俺を睨んだけど、
そんなのはお構いなしだ。

この学校、生徒は金持ちばかりだけど、教師は庶民なんだよな。
せっかくセレブな学校なのに、教師がこれじゃあ台無しだ。
ま、金持ちなら教師なんてしないか。

・・・そういえば、本城の兄貴も教師だって聞いたことがある。

俺は、前の方の席に座っている本城を見た。

萌加の「ペット」だ。

萌加の奴、なんだってあんな貧乏人の世話してんだか。
いや、貧乏人だから世話してんのか。

でも、あんなのに金を使うなんてただの浪費だ。

どうせなら、俺と付き合って金を使う方がよっぽど友好的だろ。

あれ、友好的？有効的？

ま、いーや。

萌加はモテる。

とにかく美人だし、プライドが高くせに優しかったりもする。けど何故だか男とは無縁。

自分より貧乏な男とは付き合えないってか？

それならやつぱり俺や龍聖くらいしか釣り合う男はいないだろ。

何を勿体ぶってんだか、俺がいくら「付き合ってみねー？」と言っても、

「興味ない」の一点張り。

実はレズとか？

ナツミを狙ってるとか？

いやいや、そんな訳ねーだろ。

俺の周りにそんな変態、いる訳ない。

・・・いや、一人いる。

他でもない、本城だ。

女から毎日毎日食いモンなんか恵んでもらって恥ずかしくないのか？男としてのプライドないのか？

ただのドMなのか？

俺なら、どんなに腹がすいても、あんな風に憐れまれるのだけはゴメンだ。

それなら餓死してやる。

・・・まあ、萌加からの食いモンなら食ってやってもいいけど。

つて、おい。

まさか、本城の奴、萌加に気があるとか？

だから、萌加が持ってきた食いモンを、恥ずかしがることなく食えんのか？

おいおい。

マジかよ？

本城なんかが萌加と釣り合う訳ないだろ？

俺は本城から視線を外し、萌加を見た。

萌加も俺に負けず劣らず、授業を聞いていない。

いや、俺や萌加だけじゃない。

授業なんて誰も聞いてない。

だって、聞くだけ無駄だもんな。

俺達の将来は決まっている。

親の後を継いで、金持ちになるんだ。

だから、勉強なんて必要ない。

必要なのは、本城みたいな貧乏人だけだ。

現に、本城の親が何してんのか知らないけど、本城の兄貴は教師なんて庶民的な仕事してるし。

それにしても・・・面白くない。

萌加の「餌付け」は、もう2年近く続いてる。よくもまあ飽きずにそんなことできるもんだ。

さすがに高校生になったし、もうやめるかと思ったけど、
萌加は当たり前のようにこの4月になっても「餌付け」を続けている。

このままだと高校卒業まで続きそうな勢いだ。

本城が萌加に惚れているなら、そんなことしなくても萌加は本城を
「ペット」にし続けられるのに。

そうか。

そうだよな。

よし、今度萌加に忠告してやろう。

第5話 ナツミ 「本屋さん」

授業が終わると、私は一目散に教室を飛び出した。
そしてそのまま、校舎も飛び出し、校門の外へ。

目指すは駅前のロータリーのタクシー乗り場だ。

って、校舎から校門までが遠い！！！！

どうしてこんなに遠いの！？

でも、それもそのはず。

校舎と校門の間を歩く人なんていないもんね。
業者の人か、電車通勤の教師くらい。

校舎から校門までが遠かろうが近かろうが、どうでもいいのだ。

生徒はみんな校舎のまん前まで、運転手付きの車で送迎してもらう。
もしくは、私や萌加、龍聖、健次郎みたいに、校舎のすぐ裏の学生寮に住んでいて、
そこから徒歩1分で校舎へ入るか。

4人とも家は学校から近いし、もちろん家には運転手も車もたくさんあるから、
家から通ってもいいんだけど、「寮ってちょっと面白そうだね」と言うことで、

この4月から寮生活を始めた。
寮費は確か、1ヶ月で50万。
意外と安いもんだ。

とにかく、寮に入るまでは私は毎日車で送迎してもらってたし、今は寮と校舎を往復するだけで、校舎と校門の間を歩くなんて（ましてや走るなんて！）一度もなかった。

遊びに行くときは、校舎の前までタクシーを呼んでたし・・・

って、そうだ！

タクシーを校舎の前まで呼べばいいんじゃない！

遊びに行く訳じゃないから、思わずそんなこと忘れてた！

ここ一週間、毎日駅まで走ってた私って・・・

本当におつちよこちよいなんだから・・・

健次郎達に馬鹿にされても仕方がない。

そう思うと一気に疲れが出てきた。

私は歩調を緩め、携帯を取り出す。

今からタクシーを呼んで、校門のところまで来てもらおう。

カードはあるけど、手持ちの現金は少なくなってきた。

足りるかな？

足りなかったら家に電話して誰かに持ってきてもらおう。

それなら最初から、家の車を校舎の前まで呼べばいいんだ、と言うことに気づいたのは、

タクシーを降りた時だった・・・

「いらっしゃいませ」

「は、はい」

「？」

「いえ・・・」

私は赤くなりながら、店の奥に駆け込んだ。
参考書の本棚の前で小さく息をつく。

生まれてこのかた、「本屋さん」になんて入ったことがない。

本屋さんって「いらっしやいませ」って言われても、返事しなくていいのかな？

それって失礼じゃないのかな？

でも、さっき「はい」って返事したら変な顔されたし・・・

毎回そうだもんね。

よし、明日から返事するのはやめてみよう。

そう、私は生まれてこのかた本屋さんになんて入ったことがない・

・
いや、なかった。

それがこの1週間、毎日毎日この本屋さんに通い続けている。

1週間前、初めてここに入ったのは、ほんの偶然だった。

放課後、萌加と一緒にショッピングをしてこの辺をブラブラしてた時に、急に雨が降り出した。

それで仕方なく、ここに駆け込んだんだけど・・・

運命って不思議。

子供の頃から「寺脇コンツェルンのご令嬢」として、何不自由なく育てられた私が、

こんな小さな本屋さんで普通の男の人に一目惚れしてしまうなんて

真つ赤になった私を萌加は散々からかったけど、

同級生をペットにするなんて変な趣味の萌加に言われたくない。

とにかく。

私はこの本屋さんでバイトをしている男の子に一目惚れしてしまったのだ。

パパが知ったら怒るかな？

「庶民と簡単に口を聞くんじゃない！」っていつつも言われてるし。そういえば私、子供の頃、貧乏な人と話したら自分も貧乏になるって信じてた。

さすがに今はそれはないけど、なんとなく堀西以外の人と話すのは避けてしまう。

ううん。

堀西の中でも、本城君みたいな人とは話さないようにしている。

本城君のことが嫌いって訳じゃないんだけど、話そうと思わないって言うか、話す必要もないし。

それなのに・・・

私は本屋の中をキョロキョロと見渡した。

どこにいるんだろう？

「ちょっとすみません」

「はい・・・あつ」

後ろから声をかけられたと思ったら、例の彼が私のすぐ近くに立っていた！

ええ！？どうしよう！

「あ、あ、あの、何か・・・？」

「そこ、どいてもらえませんか？本を出したいので」

彼は私の足元を指さした。

本が平積みされてある下に、棚がある。

そうか。

ここから本を出したいのね？

それで・・・私が邪魔なんだ！

私は慌てて横にずれた。

「す、すみません・・・」

「いえ。ありがとうございます」

彼は気を悪くした様子はなく、ただど素っ気無くそう言って、棚の前にしゃがみこんだ。

私は斜め上から、彼の左胸のネームプレートを盗み見る。

『月島』、クン

もちろん、何回もこうやってネームプレートを見てるし、他の店員さんが彼のことを「月島^{つきしま}」と呼ぶのを聞いたことがあるから、名前はとっくに知っている。

だけど、こうやって文字で彼の名前を見るのが嬉しいのだ。

こんな気持ち、初めて。

私はドキドキしながら、彼を観察した。

黒くてサラサラした綺麗な髪。

ちよつと冷たそうな瞳。

知的な雰囲気が漂うかっこいい男の子だ。

同じ「かっこいい」でも遊び人の龍聖とは全然違う。

年は何歳だろう？

私と同じくらいか、少し上かな？

こんなところでバイトしてるってことは、お家が貧乏で学校には通っていないのかもしれない。

きつと頭が良くて、本当はレベルの高い高校に入れたはずなのに、
こうしてお家のために働いているんだ・・・

かわいそうな月島ケン。

- ・ 私とお友達になってくれたら、お金なんていくらでもあげるのに・・・

第6話 龍聖 「完璧な女」

放課後、ナツミが凄い勢いで教室を、いや、学校を飛び出して行った。

何から何まで鈍いナツミにしては、信じられないスピードだ。

萌加に聞いたけど、どうやらナツミはどっかの一般庶民に一目惚れしたらしく、

けなげにも毎日その男に会いに行っているらしい。

いや、本当に「会ってる」のか？

単にナツミがこっそり見てるだけじゃないのか？

それって所謂ストーリーカードだと思うんだが。

ま、俺には関係ないけど、普段オトボケキャラで場の雰囲気明るくしてくれるナツミが落ち込んだりすると

昼飯食ってる時つまんないんだよな。

それとなく注意してやった方がいいかもしれない。

どうせそんな恋は報われないんだし。

それに、俺の恋も・・・

「龍聖」

待ち合わせのレストランの中に彼女の声が響いた。と言っても、彼女は大きな声を出した訳じゃない。声が響いたように聞こえたのは俺だけだろう。

だって彼女の声だから。

彼女は店員に案内されて、俺がいるテーブルにやってきた。

白い半袖のニットにタイトスカート。

それに薄いピンクのコートを羽織っている。

胸元には、小さな、それでいて強く輝く宝石のネックレス。どれも一目でそれと分かる、高級ブランド品だ。

彼女はラフな格好をしない。

いつもOL風のきちんとした格好をしている。

そして・・・美人だ。

萌加も美人だとは思うけど、彼女にはとても敵わない。

今まで俺が見た女の中で、ダントツで一番。

これは俺の欲目じゃない。

「愛」

「ごめんね、遅れて。講義の後、教授と話していたの」

教授って男？

そう聞きたかったけど、そんなのは余りにも子供染みた発言だと思
い、なんとか思い留まった。

俺は無意識にネクタイの位置を正した。

制服のネクタイじゃない。

きちんとしたスーツのネクタイだ。

こういうスーツ姿じゃないと愛には釣り合わない。

自分でも、背伸びしてるな、と思う。

だけど何もかも完璧な愛と付き合うには、これくらいの努力は必要だ。

愛は、間宮財閥という財閥の一人娘。

同じ財閥でもナツミの家の寺脇コンツェルンとは訳が違う。

間宮財閥は日本で一番大きな財閥だ。

当然愛も堀西高校の卒業生だけど、堀西短大にも堀西大学にも進学せず、

外部の普通の大学を受験し、合格した。

しかも、かなりレベルの高い大学だ。

どうしてそんなことをしたのか愛は教えてくれないけど、

そういう訳で愛は頭もいい。

顔もスタイルも完璧。

俺は初等部の時から、愛に憧れていた。

でも5歳も年上の愛が、俺なんて相手にしてくれる訳もなく。

愛の唯一の欠点、というか、まあ仕方のないことだけど、愛は男の回転が速い。

まさに「次から次へ」と言う感じ。

それも男のタイプは様々で、どう見ても色んな種類の男との付き合いを楽しんでいる。

その証拠に、同じタイプの男とは絶対に付き合わない。

そんな「愛の男コレクション」の中で欠けていたのが「年下の男」だった。

そこにちょうど俺が当てはまった。

1歳や2歳どころじゃなくて5歳も年下。金も持つてる。

どんなもんか、ちょっと付き合ってみるか。

愛にしてみれば、そんなところだろう。

いついきなり「もう別れましょ」と言われるか気がきじゃない。だけど、それでもいい。

例えばほんの一瞬でも、愛と一緒にいられるのなら。

ダメ元で、春休みに告ってみて本当によかった。

今まで散々「遊び人」と言われてきた俺だけど、ようやく本命をモノにできたんだ。

先のことは考えず、とにかく今を楽しもう。

「龍聖？オーダーしないの？」

「あ。ゴメン」

「私が頼んでいい？」

「もちろん」

ここは普段愛が使っているようなお高いレストランではない。

俺がデートに使うレベルのレストランだ。

（もちろん、普通の高校生が入る店じゃないけど）

だから愛にとって、店のサービスも味も満足行くものじゃないだろ

う。

でも、愛は俺に合わせてこういう店に付き合ってくれる。

そして注文する料理も、一応フルコースではあるけど、これも俺レベルのコース料理。

俺が支払いに困らないように気を使ってくれている・・・訳ではない。

いくら俺の家が愛の家に比べて金がないとは言え、愛とのデートくらい、どれだけ贅沢しても俺は支払える。

愛が俺にこうやって気を使ってくれるのは、

俺が変に緊張したり、

愛について行けなくなることが、ないようにだろう。

実際に、デートの支払いは全部愛持ち。

いくら俺が払うと言っても、1円たりとも出させてくれない。

愛が払うなら、それこそどんな高い店でもいいだろうに、
敢えて安い店を選んでくれている。

やっぱり愛は、俺が想像してた通り完璧な女だ。

第7話 萌加 「放課後」

私は寮生だから、学校が終わると遊びにでも行かない限り、同じ敷地内にある徒歩一分の寮へまっすぐ帰る。

龍聖もナツミも健次郎もそうだけど、最近は、

龍聖は1ヶ月くらい前から付き合い始めた彼女と頻繁にデートしてるし、

ナツミは頻繁どころか、毎日「本屋さんの彼」に会いに行っている、いや、見に行っている。

お陰で私はすっかり暇人だ。

健次郎が遊びに誘ってくるけど、二人じゃつままないし。

「じゃーな、神楽坂」

「さよなら」

と、言ってから気づいた。

本城だ！

しまった！もうちょっと何か話そう・・・

そう思った時には、本城はもう廊下の向こうに歩いて行ってしまっていた。

ああ・・・せつかく声をかけてくれたのに。

でも、それもそのはず。

「今日は何しようかな」とか考えながら、ボーっと教室の入り口に突っ立っていたんだから、

本城もさすがに無視しては行けなかったんだろう。

だけど嬉しい。

私は教室の窓から、

本城が校門へ歩いて行くのを見つめた。

今日は部活がないのか、まっすぐ帰るようだ。

本城は、堀西では珍しい、と言うか、多分本城だけだと思うけど、電車通学だ。

校舎から校門までも、校門から駅までもかなりあるけど、本城は毎日歩いている。

これもきっと、お世話になっているお家の人の負担を減らすためだろう。

だけど、ランチといい徒歩通学といい、本城は嫌な顔一つしない。私だったら恥ずかしくて、もう学校に来れないだろうけど。でも、それが本城のいいところ。

そうだ・・・！

私は鞆をつかむと、急いで教室を飛び出した。

「萌加。どっか行かね？」
「行かない」

健次郎をスルーして、私は階段を駆け下り、校舎を出て校門めがけて走った。

・・・いた！

校門から少し行ったところに、本城はまだいた。
でも、「そうだ」と思いついてここまで来たのはいいものの、この後どうするか特に考えていた訳じゃない。

「一緒に遊びに行かない？」って誘ったら、来てくれるかな？
「金ないから」って断られちゃうかな？
「お金なら私が出す」って言ったらOKかな？
でも、そんなの嫌がるかな？

ううん。私がそうしたいんだから、本城は嫌がらないはず。
折り詰めだって、喜んで受け取ってくれるもの。
問題はお金じゃなくって、本城が私とデートしてもいいと思ってるかどうか。

私は、まるで怪しい人のように本城の後ろをつけ、ジリジリと距離を縮めた。

・・・よし、声をかけよう。

そう思った瞬間。

ふいに本城が足を止めた。

気づかれた？

でも、本城は腕時計を見ると、今度は急にパツと駆け出した。

え？何？何なの？

訳がわからず、私は本城の後を追った。

足には自信がある。

でも、本城のスピードは半端なかった。

別に全力疾走している風じゃないのに、滅茶苦茶速い！

私は本城の姿を見失わないようにするので精一杯だ。

だけど本城の行き先はわかっている。

学校の最寄のK駅だ。

私は電車なんか使ったことないけど、本城が電車通学を始めてから（中学2年までは、本城も送り迎えしてもらっていた）

学校の近く・・・と言っても、歩いて20分程もかかるけど・・・にK駅という駅があるのを知った。

案の定、本城はK駅の改札に向かって走っていた。

もう私との間にはずいぶん距離ができてしまったけど、かろうじて本城が見分けられる。

私はK駅に近づくと、なぜだか近くのお店の看板の陰に隠れた。

どうしよう。さすがに電車の中までついていったら変だよね？
でも、せっかくここまで来たんだし・・・

本城が歩調を落とし、制服のポケットに手をつっこんだ。

そうか、本城は電車通学だから定期を持ってる。

きつとポケットから定期を出して、このまま電車に乗るんだ。
私も後を追うなら、切符を買わないと。

ちなみに「定期」やら「切符」やらの知識が私にあるのも本城のお陰だ。

龍聖たちはその存在も知らないだろう。

だけど、本城はポケットから手を出さず、そのまま改札へ向かった。

そして・・・

改札の前に立っている女の人が、本城に向かって手を上げた。

第8話 萌加 「予感」

・・・誰？

その女の人は、堀西の生徒じゃない。

どうしてそれが分かるのかというと、制服を着ていないからって言うのもあるけど、

どう見ても堀西に通う家柄の人じゃない。

歳は私と同じくらいだろうか。

顔もスタイルもパツとしない。

着ている服も、どこで売っているのか、いかにも安物って感じ。

健次郎の言葉を借りるなら「典型的な庶民」と言ったところか。

だけど、私の胸は不安でドキドキと音を立てた。

本城を見つけて嬉しそうな笑顔になる、女の人。

そして・・・その女の人と同じ表情の本城。

あんな本城、見たことがない。

本城は、学校の中で自分がどう見られているか知っているから、明るくて気さくだけど、友達との間にもどこか壁を作っている。いつも一歩引いてる、というか、本心を見せない、というか。

その本城が・・・

ホッとしたような明るい笑顔。

胸がザワついた。

本城はすぐにその女の人に近づき、笑顔のまま話しかけている。
・・・私にはあんな風に話しかけてくれたことなんて、一度もないのに。

二人は、駅には入らず、バス停の方へ向かった。
私も、思わずフラフラとついていく。

と。

女の人が、ポケットに入れられた本城の左腕に自分の腕を絡ませた。
照れくさそうな本城。
でも、嫌そうじゃない。

二人の声は聞こえないけど、口の動きと表情から何を話しているのかは容易に想像がつく。

『恥ずかしいだろ、やめろよ』

『えー？別にいいじゃん』

『・・・いいけど』

『あ。バスが来たよ。乗ろう！』

二人はちょうど来たバスに乗り込んだ。

一瞬迷ったけど、バスの中に結構たくさん人がいたから、私もバスに乗り、

二人から離れた場所に小さくなって立った。

・・・なんか、ストーカーみたい。

でも、気になって仕方がない。

私は二人を盗み見た。

相変わらず腕を組んだまま、楽しそうにおしゃべりしている。

堀西の制服を着た高校生の本城と、
安っぽい服の女の人。

あの人、

さっきは私と同じ歳くらいかなと思ったけど、よく見ると、多分年
上だ。

だけど身長は、170センチ以上ある本城より30センチのモノサ
シ1つくらい低い。

はつきり言って、全然お似合いじゃない。
ってゆーか、不釣り合い。

それなのに、二人の笑顔は物凄くお似合いに見える。

私は鞆を両手でぎゅっと握り締めた。

二人が降りたのは、5つほど先のバス停だった。

私も距離を置いてバスを降り、また二人の後をつける。

そこは、私は来たことがないけど、結構賑やかな駅前だった。

どこに行くんだろう？

・・・デート、かな。

だけど二人が入っていったのは意外な場所だった。

ここは・・・スーパーって言うところだろうか？

大きな3階建ての建物の周りには「本日の特売！」みたいなノボリがところ狭しと立てられていて、

子連れの自転車のオバサンなんかがたくさんいる。

ひどく場違いな所に来てしまった気がして、

私は制服を隠すように鞆を胸の前で抱きしめた。

だけど二人は慣れた足取りでズンズン中へ進んで行く。

私も入っていいのかな？

いいよね？

キョロキョロしながら、とにかく入り口の前に立った。

自動ドアが開く。

・・・店員さんのお出迎えとかはなさそう。

勝手に中に入れてことなのかな。

入り口でモタモタしていると、後ろから来たオバサンに肩をぶつけ

られた拍子に中に入ってしまった。

オバサンは謝りもせず、スタスタと進んで行く。

やだなあ・・・こんなトコ。

でも、本城がここにいるんだ。

私は気を取り直し、辺りを見回した。

ズラッと並んだ野菜や果物。

奥の方にはお肉がある。

何これ？

キャベツ？

「一玉 158円」

って安い！！

レストランだったら、キャベツがちょこっと入ったサラダが5000円とかするのに！

きっとレストランのは特別なキャベツなのね。

私がキャベツに気を取られているうちに、本城たちは更に奥の方へ行ってしまった。

人やカートが多くって、見失いそうになりながらも私は慌てて追いかけた。

そこは日用品？売り場。

お鍋とかお皿なんかが置いてある。

二人はその一角でしゃがみこんで何かを見ていた。

こんなところに何の用なんだろう？

私はまた物陰に隠れて二人の様子を伺った。

『ねえ、これは？』

『デカ過ぎだろ』

『じゃあこっち』

『・・・キティちゃん？絶対ヤダ』

『かわいいのに。ワガママね』

『・・・』

『あ！これよさげ！』

『おお、いいね。これにしよう』

『うん！』

二人は散々悩んだ挙句、ようやく決めたらしいソレを手に、レジへ向かった。

『これ、お願いします』

『1500円になります』

『俺が払うよ』

『いいの。私が払う』

私は、レジの前に置かれたソレから目を離せなくなった。

それは・・・
黒くて四角い、お弁当箱だった。

第9話 健次郎 「ホテル」

信じられない。

俺はシャワーのコックをひねった。

とたんにちょうどいい湯加減のお湯が降ってくる。

ここはホテルの一室。

ラブホテルじゃない。

ちゃんとしたホテル、それも、スイートとは言わないけどかなりいい部屋だ。

俺がここにいることが、「信じられない」んじゃない。

ここに、萌加といることが信じられない。

俺と萌加は初等部の頃からの腐れ縁だ。

俺はずっと萌加を口説いてるけど、萌加は一向になびいてくれない。

俺も俺で、一応萌加が本命ではあるけど、ちよくちよくつまみ食い
はしてきた。

たった一人の女に夢中になって、他の女とは一切遊ばない・・・な
んて馬鹿馬鹿しい。

龍聖だって、今の女にはかなり入れ込んでるけど、今までどれだけ
遊んできたことが。

それなのに・・・

俺は今日の出来事を思い返した。

「萌加、遊びに行かねー？」

放課後、俺は毎日の習慣で萌加を誘った。
当然萌加も毎日の習慣で「行かない」と言うと思ったら。

「行く」

「・・・は？」

「聞こえなかった？行くって言ったんだけど」

「そ、そうか」

龍聖とナツミも交えて4人で遊びに行くことはある。
でも、2人なんて初めてじゃねーか？

嬉しいには嬉しいが、思いがけない展開に俺は焦った。

「・・・どこ行く？」

「どこでもいいよ」

うわ！やべえ！まさかこんなことになるなんて思ってなかったから、
どこ行くかなんて全然考えてなかった！

俺は考える時間を稼ごうと、適当に冗談を言うことにした。

「んじゃ、ホテルにでも行こうぜ」

「いいよ」

「・・・」

なんだ。

どうしたってんだ、萌加。

全然らしくねーじゃねーか。

そう言えば、今日の萌加はちょっとおかしい。

朝からボンヤリしてるし、昼飯ものんびり食ってたし、

そうそう、本城の餌付けにもいかなかったな。

龍聖が理由を訊ねたら「飽きた」って言ってたけど。

ま、いつか。

萌加がホテルに行ってもいいって言っただから、俺としては何の異論もない。

「でも私、ケチ臭いのは嫌よ」

「わかってるって。誰に言ってるんだよ」

「だって健次郎の家、ラブホテルいっぱい持ってるじゃん」

「萌加をそんなとこ連れて行く訳ねーだろ。本城じゃあるまいし」

俺がそう言った瞬間、萌加がキツと俺を睨んだ。

おっと、何か気に障るようなこと言ったか？

やべえ、やべえ。せっかく萌加がその気になってくれたのに、ここで機嫌を損ねたら台無しだ。

「寮に外泊届け出して来いよ！寮の前で待ってるからな！」

俺はわざと言い捨てて、急いで教室を出た。

で、現在に至る訳だ。

俺はシャワーを浴び終えて、脱衣所に出た。

大きな鏡が一瞬湯気で曇ったが、すぐに俺の身体がはっきりと映る。湯気止めか何かをしてあるんだろう。

うーん、さすがに龍聖ほどいい男とは自分でも言えないが、まあ萌加と並んで歩いて、そう見劣りはしないだろう。

少なくとも貧乏人の本城とよりは、サマになるはず。

俺は鏡に近づき、ニヤツと笑って呟いた。

「悪いな、本城。お前の好きな女、もらっぞ」

って、全然悪いなんて思ってないけど。

その時、寝室の方の音が気になった。

何か聞こえてきた訳じゃない。

何も聞こえてこないのだ。

もしかして萌加の奴、土壇場で気が変わって帰っちまったのか？
そりゃねーだろ！？

でもあいつ、なんでか今までずっと男とは縁がなかったから処女だろっし、急に怖くなったとか？

俺は、腰にタオルを巻くと脱衣所の扉を小さく開いた。

・・・いた。

よかった。

ベッドに腰掛けて、外の景色を見る。
なんかちよつと寂しそうな顔してんな。
やっぱ何かあったのか？

まあ、いい。

とにかく今夜、萌加とやれるんだ。

俺はそのまま脱衣所を出た。

「萌加もシャワー浴びるか？浴びなくてもいいけど」
「・・・浴びるよ」

萌加は俺の方を見て、顔をしかめた。

「ちよつと。服くらい着てよ。せめてバスローブとか」
「どーせ、すぐ脱ぐし」
「・・・」

萌加は表情を硬くし、バスルームへ入っていった。

なんだ、緊張してんのか？
かわいいところあるじゃん。

第10話 萌加 「ホテル」

信じられない。

私はシャワーのコックをひねった。
温かいお湯が頭にかかる。

さつきまで、ここで健次郎がシャワーを浴びてたんだ。
そう思うと、なんとなくシャワーを強くしてしまう。

何やってるんだろう、私。

これから健次郎と寝ようって言うのに、こんなことで引いてる場合じゃない。

健次郎のことは嫌いじゃない。

でも、私は今まで本城以外の人を男として意識したことがない。
それを急に・・・

って、自分から言い出したんじゃない。

いくら男の人を知らないと言っても、私も子供じゃない。
自分のしてることくらい、わかってる。

私がさつき「信じられない」と思ったのは、この状況に対してじゃない。

今まで何年間も片思いをし、

折り詰めなんか渡し続けていた自分の馬鹿さが「信じられない」んだ。

今日のお昼休み。

いつもなら私は一番最初に教室を出るけど、今日は一番最後まで残っていた。

本城に話しかけられると思ったから。

すると、やっぱり本城は私の席にやってきた。

「神楽坂」

「何？」

「もう飯、いらないから」

「そう。どうして？」

普通に。普通に、よ。

こう言われるの、わかってたじゃない。

大丈夫、動揺なんてしてない。

「弁当持ってくることにした」

「そうなの。もしかして、昨日一緒にいた女の人に作ってもらったの？」

「え？」

本城が一瞬赤くなる。

何よ。なんでそんな顔するのよ。

「駅で偶然見かけたの。仲良さそうね。彼女？」

本城が答える前に次の質問を投げかける。
答えを聞きたいけど怖いから。

本城は少し悩んでから照れ臭そうに言った。

「うん。彼女」

「・・・」

「これから毎日弁当作ってくれるって」
「・・・そう」

それ以上、何も言えなかった。

本当は、「毎日作ってくれるってことは、一緒に住んでるの?」とか、

「どういう女の人なの?」とか、「本城は本気なの?」とか聞いた
いことはいくらかもあった。
それなのに言葉が出てこない。

こう言われるのは昨日から覚悟してたのに。

でも、このまま沈黙しているのもおかしい。

「これで私も面倒な仕事がなくなって嬉しいわ」とでも笑顔で言っ
て、

さっさと教室から出て行ってしまいたい。

ただどそうすれば、本城と私の繋がりを完全に絶ってしまうような
気がして怖かった。

「・・・お弁当、見せて」

何言ってるのよ、私。

そんなこと、どうでもいいじゃない。

本城のために彼女が作ったお弁当なんか見たって、苦しくなるだけじゃない。

だけど他に言葉が見つからなかった。

「えっ。恥ずかしいから嫌だ」

本城が顔をしかめる。

「何、照れてるのよ」

「照れてるんじゃない。本当に恥ずかしいんだって」

「・・・何が？」

「弁当の中身が」

「見せてよ」

純粹に興味が沸いてきた。

あの女の人を作ったお弁当。

もしかしてふりかけとかでハートマークが書いてあるとか？

馬鹿みたい。

私に迫られて、本城は渋々お弁当箱を開いた。

昨日見た、あの黒いお弁当箱だ。

「・・・」

「・・・」

「・・・なんか言えよ」

本城にそう言われても、私はそれから更に10秒ほど沈黙したままだった。

だって、何これ？

ご飯の上に、お肉が数枚。

それだけ。

「・・・これは？」

「・・・牛丼、だって」

「牛丼？」

本城はおずおずと訊ねてきた。

「神楽坂、牛丼って知ってる？」

「・・・テレビで見たことはある」

「やっぱ、そーゆーレベルだよな」

よくわかんないけど、お弁当に牛丼ってアリなんだろうか？

私は素直にその疑問を口にした。

すると本城は、

「だよな。ナシだよな」

と頷いた。

「ロクに料理なんてできないくせにさ、なんか『毎日作るから！』とか言っつて妙に張り切ってて・・・」

照れくさそうな本城。

言葉とは裏腹に、すごく幸せそうだ。

私が何年間も本城に渡し続けてきた折り詰めなんかより、ずっと粗末なお弁当だけど、それが本城をこんなにも幸せにできるんだ……

悩んだけど、さすがにまた制服を着てバスルームから出るのは嫌味っぽいと思い、

下着の上からバスローブを羽織って、寝室へ戻った。

そんな私の姿を見て、健次郎が笑顔になる。

いつもの人を小馬鹿にしたような笑い方じゃない。本当に嬉しそうな、幸せそうな笑顔だ。

今日の本城みたいな。

今私の目の前にいるのが本城だったら、私も死ぬほど幸せなのに。

ううん、本当に死んでもいい。

健次郎は私に近づくと、バスローブの紐を解いた。

第11話 ナツミ 「失恋」

おかしい。

この3日間、月島クンが本屋さんにいない。

1日目は「今日はお休みなのかな」と思ったけど、3日も続けてお休みなんておかしい。

もしかしたら風邪とか引いたのかな？

私は心配になり、ちょうど近くに来た男の店員さんに声をかけた。

「あの・・・ここでバイトしている月島クンって・・・今日はいないですか？」

「え？」

店員さんが眉を寄せる。

「何？君も月島にちょっかい出してるの？」

「・・・え？」

「君でもう5人目なんだよね。『月島って男の子はお休みですか？』って聞いてきた女の子。」

あいつ、人気あるから」

「・・・」

そう・・・だよな。

かつこいいもんね。

私以外にも、月島クンに憧れている女の子がいても不思議じゃない。

「月島なら、辞めたよ」

「・・・辞めた？」

嘘！？そんな！！

「そう。今は他のところでバイトしてる」

「ど、どこですか、それ！？」

私は思わず店員さんに一歩近づいた。
でも店員さんの顔はますます曇る。

「そんなこと教えられる訳ないだろ。君、ただの追っかけでしょ？」
「わ、私は・・・月島クンの友達です！」

あ！

勢い余って私、なんて嘘を・・・

だけど店員さんは尚も胡散臭そうに私を見た。

「ふーん。友達、ね」

「は、い。あの、本を借りてて返したいんです。だから・・・」
「友達だったら、直接月島に連絡取ればいいだろ」

そうですね。

ああ、完全に怪しまれてる。

私は、もうとにかくここから逃げ出そうと思い、更に嘘を重ねた。

「つ、月島クン、携帯持っていないから連絡取れなくて・・・」

今時携帯持ってないなんてことないのに。

「それで困ってて・・・あの、すみません。失礼します」

だけど、私がそういうと店員さんの態度は急に軟化した。

「あ、そうなんだ。そうだね、あいつ、必要ないって携帯持ってなかったもんな」

え？

「悪い悪い、君、本当に月島の友達なんだ」

店員さんは頭を掻きながら、申し訳なさそうな顔をした。

・・・悪いことしちゃった。

「月島は今、ここ近くの『さとや』っていうレストランでバイトしてるよ」

「！！ありがとうございます！！」

「いやいや、こっちこそ。ごめんね」

私は大きくお辞儀して、もう一度お礼を言うと本屋さんを飛び出した。

・・・いた！！

店員さんが教えてくれた「さとや」と言うお店は、本当にさっきの本屋さんの

目と鼻の先だった。

どうしてわざわざバイトを変えたんだろっ？？

まあ、いいや。

またこうして月島クンを見れるんだから。

私は窓越しに、てきぱきとオーダーを取る月島クンを見つめた。

本屋さんにいた時は、ラフな私服にエプロン姿だったけど、このレストランには制服があるらしく、カッターシャツと黒いパンツを着ている。

もちろん、堀西の制服なんかと比べるとかなり安っぽい服だけど、月島クンが着るとなんだって一流品に見える。

やっぱり、かつこいい・・・

その時。

月島クンが、こっちを振り向き・・・私と目が合った。

月島クンはそのまま私から目を離さない。

ええ？

どうして？

私がドギマギしていると、月島クンはお店の人に何か話して、

すぐに外に出てきた。そして・・・

私の目の前にやってきた。

「あのさ」

「は、はい・・・」

「君、だれ？」

「あ・・・」

名乗ろうとしたけど、余りに緊張しすぎて言葉が出てこない。
月島クンは私を無視して話続けた。

「前の本屋にも毎日来てたよね？」

「・・・」

頷けなかった。

今度は緊張のせいじゃない。

月島クンの、隠そうともしない嫌悪感のせいだ。

「何の用？てゆうか、ストーカー？」

ストーカー？

私が？

そんな！！

「違います！」

「じゃあ、何？」

「わ、私は・・・月島クンのこと、見てただけです・・・」

月島クンは、ははっと笑った。

面白くて笑ってるって感じじゃない。呆れてる。

「だから、それがストーカーなんだって。そーゆーのやめてくれない？ 気持ち悪いから」

「・・・」

「それに、その制服」

「え？」

「あんた、堀西の生徒？ 俺、堀西の奴って嫌いなんだよね」

とたんに月島クンの顔から表情が消える。

でも、逆にそれが「本当に嫌い」ということを証明している気がした。

「金は持つてるけど、心は持つてないロクデナシばかりだ」

月島クンはそう言い捨てると、お店の中へ戻って行った。

私は・・・

もう顔も上げることができず、その場に立ち尽くした。

第12話 龍聖 「慰め」

何だっというんだ、一体。

いまだかつてない程、上機嫌な健次郎。

そしていまだかつてない程、不機嫌な萌加とナツミ。

こんなんじゃ、せつかくの昼飯も台無しだ。

でもまあ、大方の予想はつく。

萌加は昨日、突然本城へ飯を持って行かなくなった。

今日もゆつくり昼飯を食っているところを見ると、持っていく気はないらしい。

本城に振られでもしたんだろう。

ナツミは・・・萌加以上に重症だ。

さつきからぼんやりと箸をくわえ、外を見ている。

こっちも例の「本屋さん」に振られたようだ。

それも、こっぴどく。

わからないのは健次郎だ。

萌加が本城に振られたから喜んでるのか？

でもこいつ、萌加が本城に惚れてるのにも気づいてなかったはずだ
けど。

一向に盛り上がらない昼飯が終わり、

俺は健次郎を生徒用のサロンの端っこに引っ張って行った。

「何、ニヤニヤしてるんだよ？」

「え？俺、ニヤニヤしてるか？」

「してるだろ」

すると健次郎は更にニヤニヤしながら言った。

「実は昨日、萌加と寝たんだ」

「は？」

健次郎は、どうだと言わんばかりに胸を張る。

・・・。

そう言うことか。

やっぱり萌加は本城に振られたんだな？
で、ヤケになって健次郎と寝たわけだ。

もったいない。

萌加のやつ、ずっと本城一筋だったからまだ男を知らなかっただろ
うに。

「そりゃ、よかったな」

俺は肩をすくめた。

「だろ？一途に頑張った甲斐があつたぜ！」

どこが一途なんだか。

俺も、人のことは言えないが。

ニヤニヤが止まらない健次郎を一人サロンに残し、俺は教室へ戻った。

もうほとんどの生徒が学食から戻り、ワイワイと騒いでいる。

その中心にいるのが・・・他でもない、本城だ。

本城は、金を持っていない（あくまで堀西の中では、だが）ということを除けば、
およそ欠点が見つからない。

ルックスもかなりいいと思うし、勉強もできる。

でもそれを鼻にかけたりせず、明るくて人懐っこいからクラスの人気者だ。

困ってる奴がいたら、当たり前のように助けてやつたりもする。

ただ健次郎が代表しているように、「本城は貧乏人だ」と言う空気があるせいか、

本城自身、なんとなく周りに対して一定の距離を保っている。

でもそれでいて、そんなことを悟られないように、誰とでも仲良くしている。

本城とほとんど接点のない俺だからこそ、そんなこともわかってしまっ

どうして萌加を振ったんだろう？

聞きたいけど、いきなり俺にそんなこと言われたらビックリするかな？

そう思って本城を見てみると、突然その本城が俺の方へやってきた。

「何？」

「え？」

「いや、東原が俺に何か言いたそうな顔してたから」

・・・鋭い奴だ。

確かに言いたいことはあったが、こんなに人が多いところじゃさすがに無理だ。

「別に。何にも」

「そっか」

本城は人懐っこい笑顔でニコツと笑うと、また友達の輪の中へ戻っていった。

・・・視線を感じる。

振り向くと、萌加と目が合った。

いや、正確には、萌加は俺と話していた本城を見ていたのだ。どうやらまだ未練タラタらしい。

プライドの高い萌加のことだ。

「元気出せよ」なんて言った日にゃ、「ほっとしてよー!」と激怒するに違いない。

今は放っておこう。

そうそう。

逆にプライドがない、って言うか、超素直な奴がいたな。

俺は、窓際の席で机に突っ伏しているナツミに声をかけた。

「ナツミ。大丈夫か？」

「・・・龍聖」

「どうした？本屋さんにストーカー扱いされて振られたか？」

ナツミの目が潤む。

「どうしてわかるの？」

「・・・もうちょっと早く忠告してやればよかったな。

「元気出せ。その素直で一直線なのが、ナツミのいいところだ。それをわかってくれる男だっているって」

「・・・ありがとう」

ナツミはそう言うと、また机に突っ伏して声を押し殺して泣き出した。

やれやれ。うちのクラスの女どもと来たら・・・

第13話 萌加 「最低」

「お嬢様。工事で道が混んでいるようですので、抜け道を使ってもよろしいでしょうか？」

運転手がバックミラーで私を見ながら訊ねた。

「いいわよ」

そんなこと、いちいち聞かなくていいのに。

だけど、運転手が私の了解を取った理由はすぐにわかった。

車はラブホテルが並ぶ、いかかわしい界限に入って行ったのだ。でも確かに、方向的にはこの道の方が早く学校につきそうだ。

私はちょっと寒さを感じ、身を硬くした。

さすがに何年も私のために運転してくれている運転手は、すぐにそれに気づき、

エアコンをつけてくれる。

「申し訳ありません。もう少し早く、車を暖めておくべきでした」
「ううん。ありがとう。私がこんな格好なのが悪いわ」

私はむき出しの肩を摩った。

ほんと、もう9月も終わりにさしかかろうとしているのに、こんな薄いドレスを着ている私が悪い。
何か羽織る物を持ってくればよかった。

今日は、お父さん主催のちょっとしたパーティがあった。もちろん私もホスト側として参加したのだけど、寮の門限が9時だから、

挨拶だけして早々に切り上げてきたのだ。

まあ、長居しても楽しいパーティじゃないし、食べる物も食べたし。

ようやく車の中が暖くなり、私は息をついて後部座席のシートに深く沈みこんだ。

窓の外を派手なネオンがチカチカ光る。

このうちの幾つかは、健次郎の親の息がかかったホテルなんだろうな。

あれからもう半年、健次郎との関係が続いている。

だけど、私が嫌がるからこういうホテルには一度も来たことがない。いつも普通のホテルのいい部屋に入る。

こういうホテルは中ってどうなってるんだろう？

ちよつと興味はあるけど、健次郎とこんなところに来たいとは思わない。

本城とだったら、どこでもいいけど。

・・・何を今更そんなこと考えているんだろう。
考えても虚しくなるだけなのに。

でも・・・本城、今何してるのかな。
あの彼女と一緒にいるのかな。
今頃・・・

あれ？

私はシートから身体を起こした。

「止めて！」

思わず大きな声を出す。
だって、あれは・・・

私は車が止まると窓を少し開け、夜だというのに昼間のように明るい通りを見た。

そこには、寄り添う一組のカップル。

本城だ。

半年前、駅で見た光景が蘇る。
あの時の胸の苦しさも。

だけど、あの時と違うことが二つある。

一つは本城が制服ではなく、私服だということ。
もう一つは・・・女が違う。
あの「彼女」じゃない。

どう見ても年上の、派手なお水系の女だ。
本城の彼女とは似ても似つかない。

それと・・・もう一つ、あの時とは違うことがあった。
本城の表情だ。

あの時のような、いかにも「素」って感じの安心しきった幸せそうな笑顔じゃない。

学校で見せる、卒のない感じの笑顔でもない。

敢えて言うなら、健次郎の笑い方に似ている。

ニヒルというか、完全に作った「ヘラヘラ」した笑顔。

あの女は、遊び用なんだろう。

女の方もそう割り切っているのか、わざと大袈裟に本城に甘えている。

そして本城もそれに応えている。

こんな場所だ。

行くところは決まってる。

本城らしくない。

私は、街に消えていく2人の後姿を瞬きもせずに見つめた。

「お嬢様」

「・・・何？」

「もう少し、ここにいらつしゃいますか？」

「出して。こんなところ、1秒もいたくない」

「かしこまりました」

翌日の本城は、いつも通りの本城だった。

悪びれる様子も、周りの目を気にする様子もない。

と言うことは、今までもああいうことを散々やってきていて慣れているってことだろう。

馬鹿馬鹿しい。

ほんと、馬鹿馬鹿しい。

本城は彼女と別れたわけではないようだ。

だって、今日もちゃんとあのお弁当を持ってきている。

しかも最初の頃は牛丼レベルだったお弁当も、すっかりレベルアップして、

見た目にも美味しそうだし、栄養バランスもちやんと考えられている。

そんなお弁当を作ってくれる彼女がいるのに・・・

私が何年も片思いしてきた男は、あんな男だったのか。

自分のことを本気で大切にしてくれている彼女がいるにも関わらず、平気で他の女と寝るような男。

最低だ。

本城も最低だけど、そんな本城を好きだった私も最低だ。

・・・そう、

私だって最低だ。

私も本城と変わらない。

振られたからって、ヤケになって、健次郎と寝ている。

健次郎が私のこと好きなのを知っていて、それを利用している。

ダメだ。

このままだと、私も本城と同じだ。

最低だ。

第14話 健次郎 「vs 本城」

「萌加、今日暇？行こうぜ」

どこに？

そんなのは言わなくても萌加も分かってる。

もちろん「ホテルに」だ。

ずっと俺に興味がなかったのが信じられないくらい、この半年、萌加は俺とホテルに通っている。

最初はその理由がわからなかったが、とにかく萌加とやれるのが嬉しくて深く考えなかった。

でも、わかった。

ってゆーか、わからされた。

寝言で他の男の名前を言われたら、いくらなんでもわかるぞ。

あの時は俺もカツとして萌加を叩き起こしたが、萌加は自分がそんなこと言ったのをまるで覚えてなかった。

それでも問いたださうかと思っただけどやめた。

萌加が俺のことを好きになったとは思ってない。

だったら下手に揉めると、もう萌加とできなくなるかもしれない。だから俺はこらえた。

我ながら、素晴らしい忍耐強さだ。そう思わねーか？

まあとにかく、そのことを除けば俺と萌加はうまく行ってる。だから当然、今日も俺の誘いを断るわけがない。そう思ってた。

「行かない」

「行かない？用でもあんの？」

「ない。でも行かない。もう健次郎とは寝ない」

「・・・何、言ってたんだ？」

俺が呆れた声を出すと、萌加は俺の目を真っ直ぐ見て言った。

「私、好きじゃない男とはもう寝ない。決めたの」

・・・よくもまあ、こうキツパリと言えるもんだ。開いた口が塞がらない。

が、俺は強引に口を動かした。

「ふざけんな。今まで散々やつといて、何今更いい子ぶってただよ」

「私達、別に付き合ってる訳じゃないでしょ。片方が寝たくなくなったらそれまでよ」

「・・・」

もし今周りに誰かいたら、俺もなんとか理性を保てたかもしれない。でもあいにく、放課後の教室には俺と萌加しかない。

2人きりだ。

俺は萌加に近づき、左手で胸倉をつかんだ。
女じゃなかったら、殴り飛ばしてるところだ。

いや、女でも・・・萌加でも殴ってもいいだろ？

俺にはその権利がある。

萌加はさすがに少し青くなっただが、それでも俺から目を離さない。
大した度胸だ。

それなら遠慮なく殴らせてもらおうじゃねーか。

俺が右手を振り上げた、その瞬間！

「村山！」

「・・・本城」

部活が終わったのか、本城が教室に入ってきた。

よりによつて本城かよ！！

くそっ！！

「何やってんだよ。神楽坂はお前の彼女だろ？やめろよ」

「はっ？彼女？こいつが！？」

俺は萌加を突き飛ばし、今度は本城の胸倉を掴んだ。

が、本城は俺の腕を振り払い、机の間に倒れこんだ萌加に駆け寄った。

「神楽坂！大丈夫か？」

本城が萌加の肩を抱き上げるのを見て、俺はますます頭に血が上った。

拳を握り締めて、本城の顔めがけて思いっきり殴りかかる。

だが、さすがに相手が悪かった。

本城は空手部だ。

それもかなり本格的にやっている。

本城は右手でなんなく俺のパンチをよけると、その反動、といった感じで俺の顔を左手で殴った。

「・・・あ。やべ」

なんだよ、「やべ」って。

全然本気で殴ってないな？

それなのに・・・なんでこんな痛いんだ・・・

俺はそんなことを考えながら、ひっくり返った。

同級生に殴られて鼻血を出した。

そんな理由で騒ぎ立てられたくなんてない。

だけど痛みには耐えられず、俺は、

「たく、なんなんだよ、お前は」とか文句を言われながら、他でもない本城に連れられて保健室へ行った。

そしたらもう、上を下への大騒ぎ。

学校へ莫大な寄付をしている村山家の息子が、
どこの馬の骨かわかんねーような生徒に殴られたんだもんな。

そりゃ校長も真っ青だろ。

だけど、もっと真っ青だったのは、学校に呼び出された俺のお袋だった。

「お宅の弟さんが、うちの健ちゃんを殴ったんですよ！！どいう教育なさってるんですか！？」

「・・・」

そんなこと「姉」に言われても困るだろ。

本城のねーちゃんの顔にもそう書いてある。

本城は、両親と一緒に暮らしていないらしく、保護者代わりにねーちゃんがやってきた。

しかし、似てねーな。

本城に比べると、すげえ地味な顔した女だ。

でも、そいつはお袋のヒステリーにも全く動じず、

「申し訳ないんですが、少し待っていただいていいですか？」と言って本城に俺を殴った理由を問いただした。

本城は、萌加のことを思ってたか、理由を言っつのを渋ってたが、ねーちゃんの、この子は理由もなく人を殴ったりしない、という信念に負けたいらしい。

渋々、「村山が、嫌がる女子に無理矢理言い寄ってたから・・・」と言った。

すかさず、お袋が反撃に出る。

「う、うちの健ちゃんがそんなことする訳ないじゃない!!!でたらめよ!!!」

「そ、そうだ、そうだ」

あ、いたのか親父。

悪いな、お袋。でも本城が言ってるのは事実だ。もつとも、俺にも弁解の余地はあるが、

「萌加に、もう寝るのはやめようと言われてカッとなった」とは言いたくない。

「どうなの？村山君」

本城のねーちゃんが、軽蔑したように俺を見た。

どーでもいい。

なんとも言ってくれ。

俺は口を噤んだ。

第15話 萌加 「嘘つき」

「本城。おはよ」

「ああ、神楽坂。大丈夫か？」

「うん・・・昨日はありがとう」

私は、部活の朝練が終わったばかりの本城に話しかけた。

本城は、体育館の裏の階段に、空手着姿のまま腰を下ろしている。

空手着姿の本城をこんな近くで見るのって初めてかも。

少しドキドキしたけど、今はそれどころじゃない。

どうしても言いたいことがある。

「嘘つき」

「え？」

本城が驚いた顔で、目の前に立つ私を見る。

「昨日、学校に呼ばれて来たのって、本城のお姉さんなんだってね」

「うん」

「4月に、私に『彼女だ』って言ったのも、あの人よね？」

「・・・」

昨日、本城がどんなお咎めを受けるのか心配で、

校長室の前にいたら、あの「本城の彼女」がやってきたのだ。

中での会話を盗み聞きすると、本城の姉だって言うじゃない！
ビックリしすぎて、声を上げそうになってしまった。

「お姉さんなの？彼女なの？どっち？」

本城は気まずそうに私から目を逸らした。

「・・・どっちでもない」

「え？」

どっちでもない？

「俺、今実家を出て知り合いの家でお世話になってるんだけど、あの人はそこのお手伝いさんなんだ。

俺にとっては、本当に姉さんみたいな人だよ」

「好きなの？」

「好きだけど、恋愛感情じゃない。本当に姉弟みたいなんだ」

中学2年で実家を出た本城には、唯一心許せる人なのかもしれない。唯一の家族なのかもしれない。

それで、一緒にいてあんなに嬉しそうだったんだ。

でも。

「じゃあ、どうして、彼女だなんて嘘ついたの？」

「・・・」

「ねえ、どうして」

本城はため息をついた。

「ああ言えば、神楽坂が俺のこと諦めてくれると思ったから」

「・・・なっ!？」

私は真っ赤になった。
怒ったからじゃない。
恥ずかしかったから。

でも、それを隠すために、私は怒った振りをした。

「自惚れないでよ!! 私が本城のこと、好きだと思ってたの!？そんな訳ないでしょ!!」

「・・・違うのか？」

「当たり前でしょ! 何勝手に勘違いしてんのよ!」

「・・・そっか」

本城はホッとして笑顔になった。

・・・何よ。

どうして、私が本城のこと好きじゃないって知って、ホッとするのよ。

「俺の勘違いか。それならいいんだ。ごめんな、変な嘘ついて」
「・・・」

何それ。

私の気持ちが悪かったの？
だから諦めさせたかったの？
だから勘違いだって分かってホッしてるの？

何それ。

何なのよ。

私は一目散に本城の前から走って逃げた。

ベッドの上で布団を頭までかぶり、今朝本城が言っていたことの意味を考えてみる。

でも、何度考えても、

本城は、私が本城のことを好きっていう気持ちに迷惑だから、私に「彼女がいる」なんて嘘をついた、という結論にしか至らない。

ショックだ。

4月、本城に彼女がいるって知った時もショックだった。失恋したと思ったから。

この前、ホテル街で本城が女と腕を組んでいるのを見たときもショックだった。

自分がこんなだらない男を好きだったのかと思ったから。

・・・それに、やっぱり少し嫉妬してた。

そんな適当に遊べるんだったら、相手が私でもいいじゃない、と思った。

でも、今日のショックは最大級だ。

好きな人に、迷惑だと思われてた。
だから本城は遊び相手にすら私を選んでくれなかったんだ。

恥ずかしい・・・

本城が迷惑がっていたことにも気づかず、ずっと好きだったなんて。

今まで自分が本城に対してしてきたことを色々思い返し、
死んでしまいたいくらい恥ずかしくなった。

私はベッドから降りると部屋を出た。

そのまま寮も出る。

どこかに行きたい訳じゃない。
とにかく何かしないと、せめて歩きでもしないと、
本当に死んでしまいそうだ。

フラフラと校門の外に出たちよつどその時、
道路の反対側に車が止まった。

そしてそこから、龍聖が降りてきた。

第16話 龍聖 「別れ」

約7ヶ月、か。

よくもったもんだ。

正直、こんなに続くと思ってなかった。

それでも、愛に「別れましょう」と言われた時は、ショックだった。精一杯、それを表に出さないように俺は言った。

「わかった。今までありがとう」

「こちらこそ。楽しかったわ」

「だけど・・・どうして急に？」

なんでそんなこと言うんだよ！と責めても、仕方ない。

終わりが来るのは最初からわかってたんだ。

最後はお互い気持ちよく終わりたいじゃないか。でも、聞かずにはいられない。

「もう、じゅうぶん一緒にいたと思うし、お互い楽しんだと思うから。」

私と付き合いたいって男は他にもいるし」

愛は、当たり前のようにそう言うと、コーヒーを飲み干した。もう行こう、という合図だ。

俺は自分のコーヒーには手をつけず、立ち上がった。

学校へ向かう車の中、俺は愛の横顔を盗み見た。
いつも通りの綺麗な横顔。

彼氏と別れたばかり、とはとても思えない。

愛には内緒だけど、実は先月、俺はある男と会った。
会ったというか、突然声をかけられたのだけど。

そいつは愛の何番目かの元彼だった。

歳は愛より10以上も上だろう。

愛と俺と一緒にいるのを見かけたらしく、ごく丁寧にも忠告してきてくれたのだ。

「あいつがお前みたいなガキに本気になるわけないだろ。

お前だって、あんなワガママで金遣いが荒い女、どうせ持て余して
るくせに。

さっさと別れた方が身のためだぞ」

ワガママ？金遣いが荒い？愛が？

いや、確かに愛はワガママかも知れないし、金遣いは荒い。

でも、俺に対してワガママを言ったことはないし、俺に金を払わせた
こともない。

デートの時はいつも学校まで送り迎えしてくれるし、金だっ
てくれる。

俺が行きたいところにはどこでも連れて行ってくれるし、

俺が喜びそうな物は、何だっ
て買ってくれる。

だけど、この男にはワガママを言い、金を出させていたようだ。

それはつまり、愛は俺に惚れてるから俺には優しいってことなのか？

違う。そうじゃない。

愛は「年下の男を甘やかす女」を演じているんだ。

そしてこの男の前では、「ワガママで金遣いの荒い女」を演じていた。

きっと、他の男の前ではまた違う女を演じるんだ。

愛は、色んな男と付き合い、その度に新しい自分を演じる。

まるでゲームを楽しむように。

だけど、そんなことやってて本当に楽しいのか？

愛は幸せなのか？

この先、愛は本気の恋なんてすることができなのか？

・・・でも、もういい。

俺には関係のないことだ。

愛と別れた俺には。

「じゃあ」

「ええ。さよなら」

「さよなら」

俺が降りると、車はすぐに去って行った。

何の未練も残さず。

あーあ・・・

女と別れて凹むなんて、いつ以来だ？

初めてかもな。

しかも、覚悟してたのに。

俺って、意外とナイーブなんだな。

・・・ん？

なんか、俺より酷い面した奴が道の向こうにいるな。

「萌加？」

俺は横断歩道もない道路を横切った。

「萌加！どうしたんだ？」

「・・・別に」

別に、じゃないだろ。死にそうな顔してるぞ。

「健次郎と・・・いや、本城となんかあったのか？」

「・・・どうして本城が出てくるのよ」

「お前にそんな顔させられるのは、本城くらいだろ」

「・・・」

とたんに、萌加がポロポロと涙をこぼし始めた。

全く。泣きたいのはこっちだつてのに。

俺は仕方なく、寮の自分の部屋へ萌加を連れて行った。

萌加はベッドに腰掛けると、泣きじゃくりながら事情を説明した。どうやら、本城は萌加の気持ちに気づいていて（当たり前だ）、だけどそれを迷惑に思っていたらしい。で、「彼女がいる」と萌加に嘘をつき、萌加を遠ざけようとしていたようだ。

プライドの高い萌加だ。

そんなことされたら、そりゃ傷つくだろう。

「よしよし。男は本城だけじゃない。ちなみに俺と健次郎も男だぞ？知ってたか？」

「・・・知らなかった」

「そんな冗談言う余裕があるなら大丈夫だな。さっさと女子寮に戻れよ。見つかったら大目玉だ」

もちろん男子が女子寮に入るのも、女子が男子寮に入るのも禁じられている。

だけど萌加は、出て行くつもりがないらしく、ベッドに転がった。

「やだ。今日はここに泊まる」

「・・・おい」

「今、私一人にしたら本当に死ぬよ」

「ナツミのとこ行けよ」

「私とナツミじゃ、それこそ通夜だよ」

・・・ナツミのやつ、まだ「本屋さん」を引きずってんのか。

諦めて俺は萌加の横に寝転がった。

「手、出さないでよ」

「・・・だったら男のところに泊まるなよ」

心は本城の物、身体は健次郎の物、な萌加に触れる気はないけど。

「まあいいや。正直俺も、今日は一人になりたくない」

「何かあったの？」

「振られた」

「ふふ。私のこと慰めてる場合じゃないじゃない」

「ほんとだよ。ったく」

萌加は俺に背を向けたまま言った。

「また泊まりに来ていい？」

「やっていいなら」

「・・・」

そんな冗談を言い合っているうちに、俺も萌加もグッスリ眠ってしまった。

第17話 龍聖 「釣り合い」

萌加と本城がどうなろうと、俺には関係ない。
でも、ちよつと気になることがある。

翌日、俺は昼飯を早めに切り上げて、教室へ戻った。
今の時間なら、教室には本城一人のはずだ。

そして予想通り、本城は一人で飯を食っていた。

あれが噂の弁当だな？

だけど、俺が教室に入っていくと、本城は慌てて肘をついて弁当を隠した。

「・・・なんで隠すんだよ？」

「い、いや・・・」

本城がこんなに焦るなんて珍しい。

俺は強引に覗き込んだ。

「・・・」

「ほつといてくれよ」

「・・・・・・」

弁当には、見事なくらいハートマークが散りばめられていた。
ご飯の上の海苔もハート。

卵焼きもハート。

野菜もハート。

ご丁寧^ごに肉までハートの形に巻いてある。

「なんだよこの、新婚ホヤホヤ弁当は」

「・・・」

「第一、コレ作ったの、お前の彼女じゃなくなつて姉貴分なんだろう？」

「・・・聞いたのか」

「ああ。萌加の奴、死ぬほど泣いてたぞ」

「・・・」

本城は諦めたのか弁当を隠すのをやめ、再び食べ始めた。

「ネエちゃんさ、嫌なことがあると俺の弁当で憂さ晴らしするんだよな・・・」

なるほど。でもこんな弁当持たされて、本城はいい迷惑だろう。そうそう、迷惑と言えば。

これが本題だった。

「どうして萌加を振ったんだよ？本城も萌加のこと好きなんだろう？」

萌加は、自分の気持ちを本城が迷惑がつてると思つてる。

でも、本当に迷惑なら、萌加の持つてきた折り詰めなんか受け取るか？

なんのプライドもなく受け取る男もいるだろうけど、本城はそんな奴じゃないと思う。

案の定、本城は気まずそうに黙りこくつて箸を進めた。

「両思いなんだから、普通に付き合えばいいだろ？」

「・・・俺と神楽坂じゃ釣り合わないよ。俺、貧乏だし」

「嘘だな」

「え？」

本城が顔を上げる。

「お前、自分が貧乏だとかそんなことだわってないだろ。萌加だつてそうだ」

「・・・」

「なんで、萌加を遠ざけるんだよ？」

本城は答えるのを少し渋ったが、ため息混じりにこう言った。

「俺、今知り合いの家で世話になってるんだけど」

「そうらしいな」

「その家つてのが・・・ヤクザの家なんだ」

「や、ヤクザ？」

おいおい。なんだそりゃ。

確かに堀西には、そういう家の息子なんかも通ってるけど（金はあるもんな）、

まさか本城がそうだとはい。

「色々悪いこともやってるみたいだけど、俺はその家が好きなんだ。将来、そこで働こうと思ってる。今世話になってる礼に、少しでも役に立ちたいんだ」

「・・・それって、本城も将来ヤクザになるってことか？」

「ああ」

「・・・」

本城の目は真剣だ。

そうか。それは確かに「釣り合わない」。

ヤクザと財務大臣の娘だもんな。

萌加は気にしなくても、萌加の親父さんが絶対許さないだろう。

でも。

「そんな理由で、萌加のこと諦めるのかよ？本城は辛くないのか？」

言いながら、野暮なこと聞いてるな、と思った。

辛くないわけないよな。

「ヤクザになったら、普通の女と付き合ったり結婚したりできないのは覚悟してる。

ましてや神楽坂なんか余計だ」

「・・・ふーん、それで、お水の女と遊んでる訳か」

「え？」

「萌加が、見たって言うてたぞ」

「！！！」

さすがに本城がバツの悪そうな顔をする。

でも、すぐに開き直ったようにニヤツと笑った。

お。なんだよ。本城ってこんな顔するのか。

「それと神楽坂は関係ない。組の先輩達が面白がって俺に女を回したりするんだよ」

「・・・」

「ヤクザの社会勉強、だつてさ」

「おお。羨ましいな、その社会勉強」

俺は本気で言った。

「だろ？」

「俺にも、ちょっと回してくれよ」

「東原って彼女いるんじゃないのか？」

「あー・・・振られた。間宮財閥のお嬢様だからな、適当に遊ばれたよ」

「東原でも遊ばれることあるんだな」

「同情するなら、女回せつて」

「ヤクザのお手付きの女なんかやめとけ。後々痛い目にあつぞ」

本城はゲラゲラと笑った。

・・・こいつ、見た目がよくって真面目っぽいだけに、
こつこつ笑いとすると、本物のワルみたいだな。

案外大物になるかも。裏の世界で。

萌加の手には負えそうもない。

第18話 萌加 「お金より大事なものの」

龍聖のお陰か、思いのほか私は早く立ち直ることができた。

本城を見るたびにまだ胸は痛むし、
健次郎とも気まずいまま。

でも、本城が私のことを迷惑だと思っていた、ということを知り、
今までの自分を振り返ることで色々気づいたことがある。

それに、自分だって失恋したばかりなのに私のことを慰めてくれた
龍聖を見て、
私にもすべきことがあると思った。

「ナツミ」

私は向かいでランチを食べているナツミに話しかけた。

龍聖と健次郎は別の席で食べている。

これも龍聖が気を回して、私と健次郎が一緒にならないようにしてくれているのだ。

「何？」

そう答えるナツミの声には元気がない。

もう半年以上も前の失恋をいまだに引きずっている。

うつん、違う。

確かに、最初の頃は本屋さんに振られたことを落ち込んでいたけど、今は、自分の人間性について悩んでいるようだ。

「いい加減、あの本屋さんのことは忘れなさいよ」

「・・・」

「でも、あの本屋さんが言ったことは、忘れちゃダメよ」

「え？」

ナツミが首を傾げる。

「どういうこと？」

「本屋さんにも、多少の偏見はあったと思うけど、確かにナツミがやってたのはストーカー行為よ」

「・・・」

「それに、無意識のうちに『自分はお金を持っている。本屋さんは貧乏だ』ってオーラを出してたのかも」

「そんな！」

今度は首をブンブンと振る。

「私、そんなこと・・・！」

「思ってない？」

「・・・わかんない」

私は席を立って、しゅんとしているナツミの隣に移動し、できるだけゆっくりと話した。

「ナツミ。ナツミは凄く素直で純粹なのよ。それはナツミのいいところ。」

ただ今までずっと、『お金持ちは偉くて、貧乏人は偉くない』って環境にいたから、

素直なナツミはそれをそのまま受け取ってしまってるだけ」

「・・・」

「私も同じ環境で育ったけど、たまたま本城のことを好きになって、本当に大事なものに気づけたの」

「え？」

ナツミが目丸くする。

やっぱり、私が本城のことを好きだって気づいてなかったんだ。鈍いんだから。

でも、これもナツミのいいところ。

「そうだったんだ・・・」

「もう振られたけどね」

「萌加が？嘘！」

「ほんと。馬鹿よね、本城。こんないい女を振るなんて」

「・・・ふふ。ほんとだね」

ナツミは久々に心からの笑顔を見せた。

そして、私に訊ねてきた。

「ねえ。お金より大事なもののって何？」

こんなセリフ、健次郎とかが言えばただの嫌味だけど、

ナツミは本当に疑問に思っている。

ナツミの周りには、そんなことを教えてくれる人間がいなかった。私も教えようとはしなかった。

一度でもナツミとそんな話をしていれば、
ナツミは本屋さんにあんな振られ方はしなかったかもしれないのに・
・

自分の冷たさに呆れてしまう。

「お金は大事よ。私も、今の生活を捨てろって言われたら、耐えられないもん。」

でも、本城のためになら捨てられる」

「・・・」

「お金より大事なものって、そういう気持ちなんじゃないかな」

「・・・そうね」

しばらくの間、ナツミは何も言わずに一人で考えていた。

私も、今はそっとしておいた方がいいと思い、黙ったまま食事をする。

そして、10分くらいたった頃だろうか。

ナツミが、しっかりとした瞳で私を見つめて言った。

「私、彼に会って来る」

第19話 ナツミ 「じめん」

授業が終わると、私は教室を飛び出した。

これ、久しぶりだなあ。

4月は毎日のようにこういう生活だったのに。

でも、あの頃とは目的が違う。

今日のお昼休みに萌加と話していて気づいた。

きつと私、月島クンに横柄な態度を取っていたんだ。

「自分はお金持ちです」って書いてあるような堀西の制服を着て、毎日本屋さんに通い、更にはレストランまで追いかけて行って・・・

月島クンが怒って当然だよな。

謝ろう。

月島クンは私のことなんてもう忘れてるかもしれないけど、とにかく謝ろう。

もう恋愛云々の問題じゃない。

私は人としてやってはいけないことをやったんだ。
謝るのは当然だ。

私は、来るように頼んでおいた家の車に飛び乗った。

よかった。いる。

もしかしたら、またバイトを変えたかもしれないと心配してたけど、月島クンは、前と同じレストランにいた。

4月の時点ですでに慣れている感じだったけど、更にスムーズに仕事をこなしているように見える。

一度にあんなたくさん食器を持てるなんて・・・すごいなあ。それに、やつぱりかつこいい。

ううん、なんかちよつと遅しくなつて、前よりかつこよくなつたかも。

つて、ころころ。

今日はそんなこと見るために来たんじゃないでしょ。

私は思い切つて、レストランの中に入つていった。外で待つてゐるんじゃ、前と変わらない。

あれから会つのは初めてだから、正直怖い。

また拒絶されるかもしれない。

でも、これ以上悪い状況もないだろう、と自分に言い聞かせて月島クンに近づいた。

「いらつしゃいま・・・あ」

月島クンの顔が強張る。

だけど私はめげずに、一気に言った。

「お話があります！向かいの喫茶店で待ってるから、お仕事が終わったら来て下さい！」

そして月島クンの返事も聞かず、走り去った。

喫茶店でミルクティーの入ったカップを両手で包むように持ち、私はこれから月島クンに言おうとしていることを、頭の中でおさらいした。

まず、「ストーカーみたいなこととして、ごめんなさい」、だ。

それから、「自分はお金持ちなんだ、って態度を取ってごめんなさい」。

「そんなつもりじゃなかったんです」とか付け加えたら、言い訳がましいかな？やめておこう。

そして、最後に・・・「もうこんなことはしません。さようなら」。

たったこれだけ言うだけなのに、どうしてこんなに緊張してるんだろう。

そもそも、月島クン、来てくれるかな・・・

また「気持ち悪い」からって来てくれないかもしれない。

だけど、待てるだけ待とう。

そう決意したけど、そんな必要はなかった。

月島クンが30分もたたないうちに、喫茶店に入ってきたから。

月島くんは私を見つけると、こっちへやってきて、私の向かいに座った。

よ、よし、言うぞー！

まずは、えっと、

「ごめん」

・・・え？

今は私の声じゃない。今は・・・

「前は酷いこと言つてごめん。気になってたんだ」

「・・・」

「謝りたかつたんだけど、次の日から君、来なくなっちゃったから・・・って当たり前だよな」

「・・・」

「あの時、俺ちよつとイライラしてて。思わず八つ当たりしたんだ。ほんと、ごめん」

「そ、そんな！」

私は首を思い切り振った。

「私がストーリーカーみたいなことしてたから・・・！あの、本当にすみませんでした・・・。

それに、堀西の生徒だからって威張った態度取ってしまったて・・・。それもごめんなさい」

だけど月島くんは不思議そうな顔をした。

「威張った態度？君が？俺に？だって、俺と君が話したのって、あの時1回だけじゃない？」

「・・・はい」

「それに一方的に俺が話したただだし。威張るも何もないでしょ」

「でも、堀西の奴は嫌いつて・・・」

「・・・ああ」

月島クンの表情が曇る。

「正確には、堀西の人間で嫌いな奴がいるってことなんだ。君がそいつと同じって訳じゃないのに、堀西の生徒だからってだけで、俺、変な目で見ちゃったんだ。ごめん」

月島クンは本当に申し訳なさそうに微笑んだ。

そうだったんだ・・・

よかった・・・月島クンに嫌われてた訳じゃないんだ・・・

私はホッとして肩の力が抜けた。

「え？じゃあ、あそこでのバイトは今日で終わりなんですか？」

「うん、明日からはまた別のバイト」

月島クンは、注文したコーヒーを飲みながら言った。

すごい、ブラックで飲んでる。

私、コーヒーなんて角砂糖を2個入れないと飲めないのに。

「バイトって言うか、授業の一貫なんだけどね」
「授業？」

「うちの高校変わってて。現場の最前線で働くのがどれだけ大変か、どれくらいお金を貰えるのか、それを肌で感じて来い、って全員強制的に色んな種類のバイトをさせられてる」

「・・・高校通ってるんですね」

「え？」

「バイトなんてしてるから、てっきりお家が苦しくて、学校に行ってないのかと・・・」

あ！私、また失礼なことを・・・
でも月島クンは、大爆笑した。

「ええ！？凄い想像力だね」

「・・・」

「そりゃ、そういうこともあるだろうけど・・・バイトなんてみんなやってるよ」

「そういうもんなんですか」

「そういうもんだよ。あはは、ほんと、世間知らずなんだな」

「・・・すみません」

私が赤くなっていると、月島クンが私を覗き込んでジッと見てきた。
うわ・・・恥ずかしい！

「えっと、君、なんて名前？」

「て、寺脇ナツミです」

「寺脇さんか。ねえ、寺脇さん、アルバイトしてみる気ない？」

へ？

第20話 ナツミ 「アルバイト」

私はドキドキしながら、バスに乗った。

えっと、まずチケットを取って・・・K駅で降りるときにこれとお金をバスの前の機械に入れるんだよね？

確か200円だ。

それからK駅で320円の切符を買って、電車に乗って、T駅で乗り換えてY駅で降りる。

うん、大丈夫。・・・多分。

昨日、あの後、月島クンは「もう暗くて危ないから」と言って私を電車とバスで学校まで送ってくれた。

月島クンのことストーカーしていた私をわざわざ送ってくれるなんて、優しいな・・・。

電車もバスも乗ったことがないって言ったら、呆れてたけど。

とにかく、私は今日から月島クンと一緒にアルバイトすることになった。

月島クンが昨日まで働いていたレストランの時給が800円と知った私は、

思わず「8000円の間違いでしょ!？」って思ったけど、間違はなく800円らしい。

1時間も働いて、800円しかもらえないなんて、世の中って厳し

い。

時給800円なら、タクシーなんて使ってたらバイトする意味がない。

家の車を使ってもいいけど、せっかく昨日、月島クンに電車とバスの乗り方を教えてもらったんだから、自分の足でY駅まで行ってみようと思った。

つて、月島クンに「5時にY駅に来て」と言われてるだけで、どんなバイトか聞いてないんだけど。

「あれ？」

バスから降りて、K駅の改札に向かうと、そこに月島クンがいた。

「月島クン……どうして？」

月島クンは、苦笑いして言った。

「いや、良く考えたらさ、昨日電車もバスも初めて乗った人に、一人でY駅まで来いだなんて、ちよつと無理言っちゃったかなと思って。電車の乗り換えもあるし」「そうだったんだ……ありがとう」

やっぱり月島クンは優しい。

私たちは切符を買って（やっぱり一人じゃ買えなかった……）、電車に乗り込んだ。

不思議だ。

昨日まで、月島クンに嫌われてると思ってずっと落ち込んでたのに、今はこうして一緒に電車に乗っている。

私は月島クンを見上げた。

155センチの私から見ると頭一つ分くらい大きな月島クン。その涼しげな瞳を見てみると、ドキドキする。

「・・・何？」

「あつ。ごめんなさい」

私は慌てて下を向く。

また、ジロジロ見ちゃった・・・

「あはは、見るのが好きなんだな」

「・・・ストーカーですから」

「ええ？あははは」

月島クンは小声だけどお腹を抱えて笑った。

「面白いな、寺脇さん。やっぱり今日からのバイトにはピッタリかも」

「どんなバイトなの？」

「それはついてからのお楽しみ」

「お楽しみ」と言いつつ、月島クンは「お楽しみ」にしているって感じではなく、

顔をしかめた。

月島クンは苦手なバイトらしい。
そんなの、私ができるのかな？

「そう言えば、堀西はバイトOKだったの？」

「うん、それが・・・わからないの」

「わからない？」

「先生に聞いたら、『今までバイトしたいなんて生徒いなかったから、バイトに関する校則なんてない』って」

「・・・」

「校則がないってことは、いいよね？」

「・・・いいんじゃない？」

「みんなー！集まってー！」

先生の明るい声に、わらわらと人が集まってくる。

その光景に私は目を丸くし、月島クンはちよつと引き気味になる。

だけどその「人たち」は、興味津々に月島クンと私を眺めた。

「紹介するわね。今日から一緒に遊んでくれるお友達の、ナツミちゃんです」

先生はそう言って、両手を後ろから私の両肩にポンと置いた。

「て、寺脇ナツミです！よろしくお願いします！」

私がお辞儀すると、
ワーツと拍手と歓声上がる。

ああ、緊張する・・・

「それと、ノエル君です」

——ノエル！？

私が口をあんぐり開けて月島クンの方を見ると、月島クンは
「何か文句でも！？」と言うように、私をギロつと睨んだ。

「・・・月島ノエルです。よろしく」

また拍手と歓声。

その甲高い声に、月島クンは「耳が痛い」とばかりに肩をすくめた。

「ナツミちゃんとノエル君は、学校があるから夕方からだけみんな
と一緒に遊んでくれます。
仲良くできるお友達ー？」

「はぁーい！！！」

元気だなあ。

それもそのはず。

ここは「どんぐり保育園」。

・・・確かに月島クンは苦手そうなバイト先だ。
そして、確かに私には「ピットリ」だ。

いくら高校の授業の一環とは言え、ここで一人でバイトするのは、さすがに月島クンも自信がなかったらしい。

それで、ピッタリな私を誘ってくれたみたいなんだけど・・・

面白そう！

本屋さんやレストランなんて、私じゃ絶対務まらないけど、子供たちと遊ぶだけなら、できそう！

もちろん月島クンも私も保育士の資格なんて持ってないから、5時半からの延長保育のお手伝いをするだけなんだけど。

「ナツミちゃあん！遊んで！」

「うん！何する！？」

「絵本読んでー！」

「任せて！ほら、『ノエル君』も誘っておいでよ」

「うん！ノエル君も一緒に遊んであげる！」

「ノエル君」はげんなりした表情で、ため息をついた。

第21話 龍聖 「結論」

「じゃあ、ナツミはまだアルバイトしてるのか？」

俺は驚いて、思わず立ち止まった。

けど、人通りが多いこんなところで突っ立ってたら迷惑だ。すぐに歩き始める。

「うん。まさかこんなに続くとは」

萌加も、信じられないよねとでも言うような顔をする。

俺達4人の中でも、特に働くこととは無縁だったナツミ。それがもう1ヶ月以上もアルバイトを続けている。

いくらあの「本屋さん」に誘われたからと言っても、ギネス級の記録だ。

「あ、もう『本屋さん』じゃないよな。保母さん？男だから保父さん？」

「保育士さん」

「なるほど。でも、そういう仕事だから、ナツミも続けられるのかもな」

「そうね。でもナツミだと、園児なんだか先生なんだかわからなくなりそう」

「はは、確かに」

俺は空を見上げながら笑った。

お互いの失恋以来、萌加とはたまにこうして出かけたりする。
気晴らしになるからな。

それと本城。

こっちもお互いぶつちやけ話をしたせいか、よく話すようになった。
ヤクザ世界の話を聞いたがる俺に、本城は「物好きだな」とか言い
つつ（本城に言われたくない）、
色々教えてくれる。

本城がそのヤクザの家に住みこむ時、「コレを目的地まで運べたら
住ましてやる」とテストされ、
麻薬を運ばされたけど実はそれはチョークの粉だった、とか、
組長の女を、組長の息子も気に入ってしまい、その女は両方と寝て
る、とか。

ちなみにその「女」っていうのが、本城が萌加に「彼女だ」と言っ
た女らしい。

つまり、本城の姉貴分。

なかなか面白い。

「そうそう。その本屋さん、じゃなかった、保育士さん、海光学園^{かいこう}
の高2らしいよ」

「海光！？海光ってあのWK（ダブル・K）！？」

「うん。ナツミは『聞いたことない学校だよね』とか言ってたけど」
「・・・」

海光学園を知らない奴なんて、日本中探してもナツミくらいだろう。

海光学園、通称WK（ダブル・K）。

将来の日本の経営トップ陣育成を目的とした、中高一貫のスーパーエリート学校だ。

確か毎年50人くらいしか入学できなくって、日本全国から受験者が殺到するとか。

すげー。

そんなところに通ってるのか、その保育士さん。

そっぴいやナツミが「バイトも授業の一環らしい」って言ってたな。海光なら、そういう授業もありそうだ。

「寺脇コンサルンの跡取りにはもってこいだな」

「そうね。ってちよつと話が飛躍しすぎじゃない？付き合ってる訳じゃないみたいだし」

「そうなのか？」

「うん。その保育士さん・・・名前、なんて言ったかな。面白い名前だった。

えーつと・・・そうそう、『ノエル』だ」

「ノエル？なんだそりゃ」

「変な名前でしょー？」

いや、「モカ」には言われたくないだろ。

しかも「萌える」に「加える」って。

どんだけ萌え萌えしないといけないんだ。

俺の冷ややかな視線に気づかず、

萌加は、クリスマスをイメージした華やかなショウウィンドウを見ながら言った。

「そのノエルって人、クリスマスイブが誕生日なんだって」

「あー、それで『ノエル』か」

「ナツミに、『クリスマスはそのノエル君と過ごすの?』って聞いたら、

『バイトがあるからそれどころじゃない!』だって」

「あはは」

「クリスマスは、毎年ナツミとショッピングとかしてたから、今年は暇だね。どうしようかな」

・・・そうだ。

俺は、ふと思い出した。

「じゃあ本城と過ごせよ」

「はあ?」

萌加が、何それ、という風に呆れた顔をする。

「そんなの本城が嫌がるでしょ」

「いや、本城も萌加のことが好きらしい」

「はああ?」

「でも、自分のお家柄じゃ萌加と釣り合わないからって、わざと萌加を遠ざけようとしたみたいなんだ」

本城の言ってることはわかるが、このままだと萌加がかわいそうだ。

本城の気持ちを汲んで自分も身を引くか、それでも本城と一緒にいることを選ぶか。

萌加にも選択する権利がある。

「・・・何を今更。龍聖、それいつ知ったの?」

「あー、萌加が振られて俺の部屋で泣いてた次の日、かな」

「もう1ヶ月以上も前じゃない。どうしてもっと早く言ってくれなかったのよ？」

あれ？

そう言えばそうだな。

なんで俺、もっと早く萌加に言っただけじゃなかったんだろ。忘れてた訳じゃないのに。

「って、萌加。なんで嬉しそうじゃないんだよ。本城がお前のこと好きなんだぞ？」

「え？ああ・・・うん、嬉しいけど・・・」

萌加も首を傾げる。

俺も首を傾げる。

うーん。

そのまま2人でしばらく考えてたけど、

「まあ、いつか」という結論に落ち着いた。

第22話 ナツミ 「彼氏」

「はい。こっちがナツミちゃん。こっちがノエル君」

「ありがとうございます！」

私たちは、大きな声でお礼を言って、先生が差し出した封筒を受け取った。

何も入っていないんじゃないかと思えるほど薄っぺらい封筒。でも、その中には1万円札が2枚。

「うわあああ！お金だ！」

「・・・ナツミは腐るほど持ってるだろ」

「持ってるけど！」

このお金は特別だ！

一ヶ月働いたことへの見返り。

すごい！私、働いてお金を稼いだんだ！！

興奮冷めやらぬまま、私はノエル君と保育園の外に出た。

バイトは今年いっぱい続くけど、お給料は一ヶ月ごとに出るらしい。ってことは、この2万円があと2回ある訳だ！

合計6万円。

凄すぎる！

「ど、ど、どうしよう。この2万円!」

「欲しい物でも買ったら?」

「そんな!もつたいない!」

「・・・」

ノエル君がため息をつく。

そうそう。

保育園内で「ナツミちゃん」「ノエル君」と呼び合っているうちに、いつの間にか外でもそう呼び合うようになった。

ノエル君はさすがに「ナツミちゃん」は恥ずかしいらしく、呼び捨てだけ。

「ノエル君は、そのお金何に使うの?」

「え?別に・・・。そうだ、せつかくバイト代も出だし、飯でも食つていこうか」

「へ?」

ノエル君と食事?

嘘!

ほんとに!?

「でも、もつたいない!」

「・・・。じゃあファーストフードにしようか。マック・・・うーん、せつかくだからモス」

「マックとモスってどう違うの?」

「モスの方がちょっと高い」

「じゃあ、マック!」

「・・・」

という訳で、私たちは駅前のマックに入った。

「へえー。これが『マック』かあ。マックって、マクドナルドの略だったんだね」

「・・・入ったことない？」

「うん」

「・・・」

「あ。あそこの席、空いてるよ」

「その前に注文しないと」

なるほど。

レストランみたいにウェイターがオーダーを取りに来てくれる訳じゃないらしい。

学食みたいだ。

「いらっしやいませ」

「こ、こんにちは」

私が挨拶すると、ノエル君が噴出した。

「な、何!？」

「いや・・・はは・・・うん、いいことだよ。挨拶は・・・あはは」

「本屋さんでも笑われた」

「だろうね。でもその心がけは忘れない方がいいよ。あははは」
「？」

ノエル君がどうして笑ってるのかわからないけど、
私たちはとにかく注文し、ハンバーガーを受け取って席についた。

「・・・何してるの？」

「え？だって、こうやって食べるんじゃないの？」

オープンサンドのイメージでハンバーガーを分解している私を見て、ノエル君が眉をひそめた。

「そのままかぶりついたらいんだよ」

「このまま？だって、大きいじゃない」

ノエル君はもはや説明するのも面倒なのか、パクパクとハンバーガーを食べだした。
なるほど。そうやって食べるのね。

私ももう一度ハンバーガーをサンドして、ノエル君の真似をして食べてみた。

「美味しい！こんな味、生まれて初めて！」

「・・・」

「ハンバーガーって美味しいね！」

「・・・そうだね」

私が夢中でハンバーガーとポテトを食べていると、ノエル君が不思議そうに私を見た。

「何？」

「堀西の生徒のくせに面白いなあ、と思って。いや、堀西の生徒だから面白いのか・・・」

ノエル君はちよつと複雑な表情。
そつえば前、堀西の人で嫌いな人がいるって言ってたっけ。

優しいノエル君が「嫌い」だなんて。

「・・・ノエル君が嫌いな人ってどんな人なの？」
「・・・」

ノエル君が急に険悪な表情になる。
よっぽど嫌いらしい。

「俺、姉がいるんだけど・・・その彼氏」
「え？お姉さんの彼氏が堀西の人なの？」
「もうとくに卒業してるけどね」
「そうなんだ・・・その人がどうかしたの？」

いくら私でも想像つくけど。
そしてノエル君の答えはその想像通りだった。

「姉さんは本気だったみたいだけど、あっさり捨てられたんだ」
「・・・」

「やつぱ堀西に通ってた人間は、一般人なんかと付き合っても面白くないんだろ。金持ってるじゃないし」

「そんなこと！そんなこと、ない。私はノエル君といて、楽しいもん」

「金持ってるのに？」
「そんなの関係ない！」

・・・あつ！

これだ！
萌加が言っていた「お金より大事なもの」。
そうか・・・これだったんだ・・・

私も見つけられた。

ノエル君と萌加のお陰で。

「ねえ、私も友達に言われたんだけど・・・。

ノエル君のお姉さんの彼氏も、もしかしたら『お金持ちは偉いんだ』
って思い込んでるだけなのかも」

「え？」

「堀西に通ってる生徒ってね、自分の家も友達の家もみんなお金持
ちで、お金なんてあつて当たり前って

思い込んでる。自分が恵まれてるってわかってない。誰もそんなこ
と教えてくれないもん。

私もそうだった」

「・・・」

「お姉さんの彼氏も、そうかもしれない。ちゃんと話せばわかって
くれるんじゃないかな」

ノエル君が俯いた。

そんなことない！って思ってる顔じゃない。

そうかもしれない、って思ってる顔だ。

「それに私、ノエル君のお姉さんが、本当に心無い人のことを好き
になるとは思えない」

「ナツミは俺の姉さんのことなんか知らないだろ」

「ノエル君のお姉さんのことは知らないけど、ノエル君のことなら
知ってるもん」

「・・・」

ノエル君が最初に、「堀西の人間は嫌いだ」と言っていたのは今年
の4月。

つまり少なくとも半年前に、ノエル君のお姉さんは彼氏に捨てられたことになる。

今更、私がこんなこと言っても何にもならないかもしれない。
ううん。何にもならないに違いない。

でも、言わずにはいらなかった。
萌加が私にそうしてくれたように。

第23話 萌加 「眠り」

「なんだ、それ!？」

わかる。

わかるよ健次郎、その気持ち。

私も30分前に同じこと言ったから。

今日も私とナツミとは別にランチしてた健次郎だけど、
学食を出ようと私たちの横を通った時、ナツミの手元を見て足を止めた。

で、「なんだ、それ!？」だ。

「見てわかんない？」

ナツミが得意そうに言う。

「・・・弁当」

「正解」

本城のお弁当事件があったから、私としてはもうお弁当なんて見た
くもないんだけど、

ナツミがお弁当を持ってきたとなれば、見ずにはいられない。

目の前で食べられてるからじゃなくって、

驚きの余り、目が離せないのだ。

「どーゆー冗談だ？」

「冗談じゃないわよ！本気よ！これから毎日持ってくるんだから！」

「なんのために？」

「節約のために、決まってるでしょ！」

30分前に私とナツミの間で交わされたのと全く同じ会話が、健次郎とナツミの間で交わされる。

「そんなことしても、せいぜい千円とか2千円浮くぐらいだろ」

「健次郎！千円稼ぐのってどれだけ大変だと思ってるの！？」

「・・・」

「子供たちに絵本読んで、一緒にお絵かきして、おやつ食べさせて、トイレ連れて行って、

おもらししたら着替えさせて・・・って、これだけやっても千円って貰えないのよ！？」

「・・・」

「それから私、寮も出るの。だって、月50万もするのよ！50万あつたら、

100円マックがいくつ買えると思ってるの！5000個よ！」

「・・・」

「あ。私、教室戻らなきゃ。保育園のクリスマス会のために、折り紙でツリーを作るの。じゃあね」

「・・・」

冷戦状態だということも忘れて、私と健次郎は、意気揚々と学食を出て行くナツミの後姿を呆然と見送った。

「なんだ、ありや」

「ねえ」

「なんか悪いもんでも食ったのか？」

「好きな人に影響されたみたい。今は、ナツミの方がその人よりイッちゃってるけど」

「・・・。ところで、100円マックってなんだ？」

「さあ。ってあれ、一人なの？龍聖は？」

「朝からいないだろ。風邪引いたらしい」

「へえ。馬鹿でも風邪引くのね」

「そうだな」

「健次郎は引かないのね」

「・・・」

ちよつと辺りを見回して、誰もいないのを確認してから私はドアをノックした。

「・・・はい」

元氣のない声が部屋の中からして、ドアが開いた。
本当に参ってるらしい。

「？誰？」

「見てわかんないの？」

「その声・・・萌加か？」

「もちろん」

「・・・わかるわけないだろ、そんな格好じゃ」

龍聖が呆れたような声を出す。

私は自分を見下ろした。

黒いパンツに黒いコート。

顔にはマスクとサングラス。

あと、黒い帽子。

髪の毛はその中にまとめてある。

「どう見ても変質者だぞ」

「そう？」

だって男子寮に入るには、少し変装した方がいいと思って、それでも一人じゃここまで来れなかった。

健次郎が寮事務所の人の目を引いておいてくれたのだ。

ゲホゲホとせきをしながら龍聖が私を部屋の中に招き入れた。

「何しに来たんだよ」

「お見舞い」

「はあ？」

龍聖はフラフラとベッドに倒れこみ、布団を頭からかぶった。

「大丈夫？」

「・・・じゃない」

「みたいね」

私も龍聖に続き、ベッドに潜り込む。

「・・・何やってんだ」

「看病」

「そんなことして、襲われても文句言えないぞ」

「泊まりにきていいって言ったの、龍聖じゃない」

「やっていいなら、って言ったろ」

「そんなにフラフラで、やれるもんならやってみなさい」

突然、龍聖がガバツと身体を起こして、私の上に覆いかぶさった、
と言っか倒れこんだ。

「・・・死ぬ・・・」

「はいはい。さっさと寝てね」

私は笑いながら、龍聖の背中に手を回した。

熱い。

背中も、私の頬に当たる龍聖の顔も。

私はベッドの上の方に移動して、龍聖の頭を胸に抱いた。

「ねえ、看病してあげてるんだから、治ったら連れて行って欲しい
ところがあるの」

「押しかけ看病のくせして何言ってる・・・どこ行きたいんだよ？」

「100円マックが買えるところ」

「は？マック？」

「知ってるの？」

「マクドナルドだろ。昔、堀西以外の女に連れられて行ったことがある」

「・・・ふーん」

女、ね。

「ナツミがね、急にお弁当持ってきたの」

「は？マツクと何の関係があるんだよ。ってゆーか、なんだ、その面白い話は」

「しかも、寮の朝ごはんを詰めただけなのよ」

「あははは、ナツミらしい・・・っ、笑ったら頭痛い・・・」

「続きは明日の朝ね」

「・・・うん」

そして私と龍聖は、あの日のようにいつの間にか眠っていた。

・・・抱き合ったままで。

第24話 健次郎 「横槍」

今日は家に帰ってきた。
なんでかって？

萌加が急に、風邪を引いた龍聖を見舞いたいなんて言って、
男子寮に来たからだ。

最近あの2人は仲がいい。

いや、前から仲はよかったが、最近は男と女として仲がいい。
もちろん俺としては面白くないけど、萌加にきっぱり拒絶されて以
来、

俺も萌加への気持ちがちよっと冷めた。
だから、もういい。

だけど今頃、寮の龍聖の部屋で2人がやってるのかもしれないと思
うと、なんとなく寮にいたくなくて、
家に泊まることにしたのだ。

ところが。

俺が家に入ると同時に、一人の男が家の中から出てきた。
赤い髪に、金のピアス。

歳は20代前半と言ったところか。
って、そんなことはどうでもいい。
なんでこんなチンピラみたいな奴がうちにいるんだ。

「大谷さん！今日は、どうも・・・あら、健ちゃん」

大谷っていうらしいチンピラを追いかけてきた俺のお袋が、俺を見て目を丸くした。帰るって連絡してなかったからな。

「村山さん。それじゃー失礼します」

「あ。今日はありがとう。さよなら」

お袋は、この手の人間が嫌いはずだ。

親父の仕事上、どうしてもこういう人間を相手にしないといけない時も、

決していい顔はしない。

それが今日はどうだ。この笑顔。

何かよほどいいことがあったらしい。

「母さん。さっきの奴、誰？」

大谷って奴が家を出た後、俺はリビングでお袋に訊ねた。

お袋は相変わらずニコニコしている。

でもよくみると、普通の笑顔じゃない気がする。

なんかちよつと・・・危ない。

「大谷さんて言って、お父さんのお仕事の関係で一度お世話になったことがあるの」

お世話、ねえ。

「今日も親父の仕事関係で？」

「いいえ。今日は私が前に頼んだお仕事の結果報告に来てくれたの」

「・・・母さんが頼んだ仕事？」
「そうよ」

お袋は得意そうに笑った。

・・・なんだよ。

なんか、嫌な予感がする。

「前に健ちゃんを殴った本城って子、いたでしょ？」

本城？

なんで急に本城が出て来るんだよ！

「あの子、結局なんの処分もなしだったんでしょ？」

「・・・ああ」

俺から萌加を助けたただけだもんな。

「だから、代わりに私が『処分』してあげたの」
「・・・はっ？」

俺は思わずソファから立ち上がった。

「処分」？なんだ、それ！？

いや、今日、本城はちゃんと学校に来てた。

あいつは部活があるから、まだ学校のはずだし・・・「処分」って何したんだ？

俺が呆然としているのを見て、お袋は更に得意気になって言った。

「あの子に直接何かするより、あの子のお姉さんにした方が、2人

ともシヨツクが大きいと思って」

「・・・お姉さん？あの時、校長室に来た？」

「そうよ。あの女・・・私たちを散々コケにして・・・許さない」

お袋の顔が急に癡猛になる。

昔からそうだ。

お袋はキレると手がつけられない。

俺は青くなった。

だって、あのチンピラが女に対して「処分」って・・・やることは決まってるよな。

おいおい。

いくらなんでも、そりゃマズイだろ。

犯罪だ。

「健ちゃん？どうしたの？」

「・・・母さん。やりすぎだろ」

「大丈夫よ。バレないわ。バレても捕まるのはさっきの大谷だけ」

大谷がお袋のことをしゃべったら、うちも危ないけどな。

でもお袋はそんなこと考えもしてないらしい。

自分が直接手を下したわけじゃない、だから安全だ、ってか。

くそっ！馬鹿め！！

俺はイライラしながら自分の部屋へ入った。

別に本城や本城の姉貴がどうなろうと知ったことじゃない。

でも、やっと俺も萌加のことを吹っ切れて、
今日は久々に普通に話せたんだ。

萌加も本城のことを諦めたのか、今は龍聖と一緒にいる。
ナツミも、笑えたけど本人は至って幸せそうだった。

やっと・・・やっと昔みたいなの4人に戻れそうなんだ。

今、変な横槍を入れないでほしい。

俺は、鞆をベッドに叩きつけた。

本城の姉貴はどうなったんだろうか？
本城はもう知ってるんだろうか？

くそっ！！！！！！

第25話 健次郎 「第2ラウンド」

翌日、俺は登校してすぐに本城の席へ行った。

何をどう話そうとか考えてた訳じゃない。

ましてや、謝ろうなんて思っちゃいない。

だけど・・・

なぜだか、本城のところへ行かずにはいらなかった。

「よお」

「・・・」

本城が胡散臭そうに俺を見る。

俺から本城に話しかけるなんて、初めてだもんな。

俺も、「よお」とは言ったものの、そこから言葉が続かなかった。

「・・・」

「なんだよ、村山。なんか、用？」

用だど？てめーに用なんかねーよ。

「・・・お前の姉貴、元気か？」

「は？」

本城が眉をひそめる。

そして、目が鋭くなった。

「なんで、急に俺の姉貴のことなんて聞くんだ」

「元気が、って聞いているだけだろ」

「・・・元気だよ」

嘘つけ！

「そうか。そりゃよかった。俺はまた、自殺でもしたんじゃないか
と思ったよ」

あ。やべえ。

「・・・なんだと？」

本城の目がますます鋭くなった、と俺が思った時には、
本城が俺に殴りかかっていた。

不意をつかれた俺は、そのまま本城と一緒に机の上に倒れこむ。

「てめえ！！」

本城が本気で俺を殴る。

前みたい左手じゃなく、右手だ。

容赦なく何発も殴られて、俺の意識はすぐに薄れて行った。

遠くに、萌加とナツミの悲鳴と、龍聖が本城を止める声が聞こえた。
・
・

「健次郎。大丈夫か？」

「・・・龍聖？っつ、いてえ・・・」

「当たり前だろ、あんだだけ殴られりゃ」

俺は寝ていたベッドから身を起こした。

「ここは？」

「保健室。もう少しで病院送りだったんだぞ」

見回すと、確かに保健室だ。

「そっか、龍聖が本城を止めてくれたんだったな。ありがとな」

俺はホッとして、もう一度ベッドに横たわった。

ベッドの脇の椅子に腰掛けている龍聖がため息混じりに言う。

「そんなのはいいけど。何があったんだよ。本城、マジでキレてたぞ」

「そっついや、本城は？」

「萌加がなだめてる」

「おお、そりゃ本城もおとなしくせざるを得ないな」

「そんなこと言ってる場合かよ・・・」

龍聖がもう一度ため息をつく。

「ま、自業自得だ。悪いのは俺じゃないけど」

「え？」

「お袋が、チンピラ使って本城の姉貴を襲わせたんだ。前に本城が俺を殴ったから仕返しだってさ」

「・・・えつ。本城の姉貴を？」

龍聖は目を見開いて、絶句した。
そりゃ驚くだろうけど・・・龍聖、なんか青くなってるぞ。

「健次郎・・・それ、ちよつとヤバイかも」

「ヤバイよ。警察に捕まるかもな」

「そうじゃなくて！」

「え？」

龍聖は声を小さくする。

「本城の姉貴つて、本当の姉貴じゃないんだ・・・まあ、それはいいんだけど、

その女、ヤクザの組長の女なんだぞ」

「ヤクザ？」

「本城は今、ヤクザの家に住んでるらしい。そこのお手伝いさんを、本城が姉貴みたいに慕ってるんだ。

で、そのお手伝いさんつてのが、組長の愛人なんだ」

「・・・へえ」

「へえ、じゃないだろ！そんな女に手を出して・・・警察の前に、そこのヤクザに捕まったら、本当に殺されるぞ！」

「そうかもな」

「そうかもな、って・・・」

俺は息をついて目を瞑った。

殺される覚悟をした訳じゃない。

安心したんだ。

なんて言うか・・・悪いことしたらバチが当たる、みたいな？
そついうのがちゃんと成り立ってて、安心した。

もしお袋や俺になんのバチも当たらなかったら、
本城と本城の姉貴は泣き寝入りだもんな。

やっぱ悪いことはしちゃいけない。

まあ、やっぱりちょっと怖いけどな。

第26話 健次郎 「いつか」

一日休んで、翌日俺は学校へ行った。

いつも通りの朝の教室。

だけど、俺が教室に入った瞬間、全員の視線が俺に集まった。決して好意的な視線じゃない。批判的な視線だ。

俺が本城に対して何をしたのかは、みんな知らないだろう。だけど「本城があれだけ怒るんだ。村山が何か悪いことをしたに違いない」って思ってるのがわかる。

つまりそれだけ本城はみんなに信頼されている、ってことだ。

金持ちの俺より、貧乏人の本城を取るのかよ。

よく「金の切れ目が縁の切れ目」なんて言うけど、世の中捨てたモンじゃないな。

俺はまたちょっと安心した。

でも、こんなに傷だらけの俺を少しくらい労わってくれてもいいだろう！

すげー痛いんだぞ！

と、俺に向けられた視線の中でも一際鋭い物を感じ、俺はそつちを見た。

・・・本城だ。

驚いた。登校してきてやがる。
なんの処分もなかったのか？

同級生を、しかも俺をこんなに殴っておいて？

そうか、本城のバックにはヤクザがいるんだもんな。
たぶん堀西の経営陣とかにコネがあるんだろう。
コネってゆーか、脅しか。

本城は俺と目があうと、一秒でも同じ空間にいたくないとでも言うように教室を出て行った。
思わず俺も本城の後を追う。

「本城！」

呼びかけても本城は止まらない。
それどころか次第に足が速くなる。

俺もそれを追いかけて、いつの間にか2人して校庭に走り出ていた。

「待てって！」

「んだよ！！！」

俺がようやく本城の腕をつかむと、
本城は見たこともない険しい表情で俺を睨んだ。

息が上がっている。
走ったからじゃなくて、怒ってるからだろう。

「俺に話しかけんな！」

「・・・悪かったよ」

「はあ!？」

本城の剣幕に思わず謝ってしまった。
なんで俺が謝らないといけないんだ。

でも・・・

「だから、悪かったって」

「謝ったからって許されると思ってんのか!？」

「・・・」

「ただで済むと思うなよ!！」

「思ってない。お前んち、ヤクザなんだろ」

本城が片目を細める。

「わかってるんだったら覚悟しとけ」とでも言いたげだ。

「そのうち、警察かお前んとこのヤクザが俺の家に押しかけてくるんだろーな」

「・・・いい度胸してんじゃねーか」

「まあ、しょーがない。こっちが悪い」

「・・・怖くないのかよ」

「怖いけど。だからって許してくれるわけじゃないんだろ」

「当たり前だ」

本城が俺の手を振り払った。

俺も抵抗はしない。

警察かヤクザに捕まれば、もう本城と直接話す機会はないかもしれ

ない。

本城に言いたい事は言った。
もうじゅうぶんだ。

「あ。やべ、1限が始まる。じゃーな」
「・・・」

俺はスッキリした気分で教室へ戻った。

それから何日かして、お袋が半狂乱で俺に電話してきた。
どこかの情報屋から、本城の姉貴分の立場を知ったようだ。

あと、大谷って奴も警察に捕まったらしい。

なんでもかなりボコボコにされた状態で、クリスマスに警察の前に
放置されてたとか。

ヤクザから警察へのクリスマスプレゼントか。面白いな。

「け、健ちゃん・・・!!どうしましょ、私、私・・・」

「母さん、落ち着けて。大丈夫だって」

「え?」

「捕まるときはみんな一緒だ」

「健ちゃん!!!」

だけど、それから何日たっても、何ヶ月たっても、俺の家に警察も
ヤクザも押しかけてくることはなかった。

俺の勝手な推測だが、多分、本城が組長とやらの口添えしてくれた

んじゃないかと思う。

なんでそう思うのか、自分でもよくわからないけど。

俺と本城はあれ以来一度も口をきいてないが、一触即発って訳でもなく、お互い無視しあっている感じだ。

多分ずっとこのままだろう。

お互いのためにもその方がいいと思う。

だけど、もし機会があればいつか聞いてみたい。

なんで俺を見逃したんだ？って。

でも聞くだけ無駄か。

どうせ本城は「なんのことだ？」って言うに決まってるから。

第27話 ナツミ 「分割」

「ノエル君、バイバイ」

「また遊びにきてね！」

「また逆上がり教えてね！」

「うん。じゃあな」

たくさんの小さな手に送られて、

ノエル君は照れくさそうに保育園を後にした。

12月24日、クリスマスイブ。

ノエル君の保育園でのアルバイトが今日で終わった。

最初は渋ってたノエル君だったけど、なんだかんだ結構楽しんだ。

私は子供たちと一緒に遊ぶ感じだけど、

ノエル君は敢えて子供目線になることなく、素で行く感じ。

それが逆に子供たちにもうけていた。

「うつつ」

「・・・なんでナツミが泣いてるんだよ。ナツミは結局保育園でのアルバイト続けるんだろ？」

「そうだけど・・・今日でノエル君に会えるのも最後だと思うと・・・
うつつ」

駅への帰り道、私が号泣しているとノエル君は私の頭をポンポンと叩いた。

「俺となんていつでも会えるだろ」

「・・・会ってくれるの？」

「会いたくないなら会わないけど？」

「会いたい！」

夢中で答えた私に、ノエル君は「わかった、わかった」と言いながら笑った。

・・・会ってくれるんだ。これからも。

・・・嬉しい。

「あの・・・だったら、ノエル君にプレゼントしたい物があるんだけど」

「プレゼント？」

「クリスマスイブだし、ノエル君の誕生日だし」

「いいよ、そんなの。俺も用意してないし」

「いいの！どうしてもあげたい物があるの！」

私は、遠慮するノエル君を遠慮なしにあるお店に引っ張っていった。そこは・・・

「携帯？」

「うん！ノエル君に携帯をプレゼントしたいの！」

ノエル君の学校は全寮制らしく、携帯がないととにかく連絡が取れない。

寮に電話するのも気が引けるし。

今までは毎日保育園で会えたから、携帯がなくても不便じゃなかったけど、

これからも私と会ってくれるなら、携帯を持っていてほしい。

「・・・そつか。そうだよな」

「うん・・・」

「ありがとう。お言葉に甘えるよ」

「いいの。ノエル君が携帯を持ってくれたら、私も嬉しいから」

私はノエル君と一緒にお店に並ぶ携帯を見て回った。

今まで携帯を買う時に値札を見ることなんてなかった。

欲しいデザインの携帯を見つけたら、お店の人に「これください」って言うだけだった。

でも、よく見ると携帯って高い！

安くても3万はする。

ちよいつといいな、って思う奴は5万以上。

信じられない！なんでこんなに高いの！

お金、足りるかな・・・

ノエル君へのプレゼントは、バイト代から出そうと決めていた。

カードを使えばどんなに高い携帯だって買えるけど、それじゃ意味がない気がする。

だって、私の親のお金だもん。

私の親からノエル君へのプレゼントみたい。

私は、私からノエル君へプレゼントをあげたい。

マックとかでちょっとは使っちゃったけど、まだ5万以上は残ってる。

たぶん大丈夫だ。

「これにするよ」

そう言つてノエル君が選んだのは、シンプルで薄いブラックの携帯。電話とメールの機能以外には、カメラとテレビくらいしかついてなさそう。

値段も3万7千円と若干お安目だ。

「こんなのでいいの？もつと高機能なのがいいんじゃない？」

「携帯初心者だから、使いこなす自信ない」

「ふふ、そっか」

私がお財布からお金を取り出そうとすると、ノエル君がそれを制した。

「俺、携帯初心者だけど、この携帯会社の料金体系は知ってるよ」

「え？」

「携帯代つて、一括でも払えるけど、たいていは月々の通話料と一緒に分割で払うんだ」

「分割？」

「そう。12ヶ月とか24ヶ月とか。利子は付かないし」

ノエル君はわざと意地悪っぽく言った。

「庶民は金を持ってないから、携帯を一括でなんてなかなか買えないんだよ」

「でも！じゃあ私、どうやってお金を出せばいいの？」

毎月の通話料と一緒に携帯代を分割で払うってことは、通帳とかか

ら引き落とすんだよね？多分。
だったら、私、払えないじゃない！

「俺に金だけ渡してくれればいいよ」
「あ、そっか」

なるほど。

私はお財布から3万7千円取り出して、ノエル君に差し出した。
でもノエル君はそこから千円札を1枚だけ抜き取った。

「分割、だからね。後3万6千円。毎月千円ずつもらっよ」
「へ？」

「何ヶ月かかるかなー」

「・・・36ヶ月」

「正解。頑張つて会い続けないとね」

・・・それって、

これから36ヶ月も、

ずっと会ってくれるってこと？

ノエル君・・・

「で、3年後の12月24日にはまた携帯をプレゼントしてね」
「・・・それも分割？」

ノエル君は、「もちろん」と言っただけで笑った。

第27話 ナツミ 「分割」 (後書き)

次回、最終話です。

第28話 龍聖 「2年後」

俺は電車から降りると、ホームを走りぬけ、改札をくぐった。そしてそのまま、駅からまっすぐ伸びた道を走る。

やばいなー。待ち合わせギリギリだ。

萌加の奴、普段はグータラのくせして、俺との待ち合わせにはやたら厳しいからな。

遅れたら、またなんか奢られる。

奢るのはいいけど、前みたいに強引にチョコレートパフェにつき合わされるのはゴメンだ！

客待ちをしているタクシーが、視界の端に入る。

乗ろうかという誘惑に駆られるが、

そんなことしたらますます萌加の機嫌を損ねるだけだから、やめよう。

萌加と付き合い始めてもう2年以上たつ。

いつかの愛じゃないけど、俺にとっては最長記録だ。

この記録は多分これからも破られることはないだろう。一生。

2年と言えば、なんとナツミも保育園のバイトをずっと続けている。しかも、堀西短大で保育士の資格を取るらしい。

それとはかく、ナツミの発達した経済観念(?)のお陰で、何故か俺と萌加まで、今ではすっかりエコノミーな人間になってしまった。

無駄遣いしようものなら、すかさずナツミからブーイングがくるか

らな。

移動は全部電車だし、デートも映画館や遊園地に行くぐらい。

堀西大学に入ったら一人暮らししたいと思ってたのに、それも萌加に「お金の無駄よ」と一蹴されてしまった。

文句を言いたかったが、俺自身「やっぱり？もったいないよな。やめところ」と納得してしまう始末。

親が本気で心配している。

健次郎は相変わらずだ。

昔ほど金遣いは荒くなくなったが、女にはだらしないし、勉強する気もゼロ。

そして・・・家を継ぐ気もゼロ。

昔は、親の後を継いで豪遊生活するのが夢だと言ってたのに、急に「自分がやりたいことをやって食って行きたい」とか言い出した。

「やりたいことってなんだよ？」って聞いたら、「さあ。まだ見つけてない」と抜かしてたが。

とりあえず俺と一緒に堀西大学の経済学部へ進学するけど、やる気はなさそうだ。

そつだ。大学と言えば、あいつ・・・

「あれ？」

俺はビックリして足を止めた。

今、頭の中に出てきた顔が、道の少し前にあったからだ。

「本城！」

「東原？久しぶりだな」

「1月の卒業式以来だな。2ヶ月ぶりか」

「ああ」

俺は本城に歩み寄った。

本城、なんか大人びた気がする。

私服姿だからか？

いや、なんかちよつと雰囲気が変わったかも。

「本城、お前外部の大学受けたんだろ？どうだったんだよ？」

「受かった」

「おお。おめでとう。どこの大学？」

「ありがと。H大だよ」

「・・・H大？」

国立の？

あのレベルが高い？

「うわ！すごい！よく受かったな」

「運が良かった」

いや、そんなことないだろう。

元々本城は勉強を頑張ってたが、高3の時は本当によく勉強していたと思う。

そつだな。あれだけ頑張ってたや、H大も受かるかもしれない。

それにしても、凄いが。

「お前、将来ヤクザになるんじゃないのかよ。H大なんかに行ってどうする」

「インテリなヤクザを目指すよ」

「・・・すげー嫌味な人間だな」

久しぶりにもう少し本城と話していたかったが、お姫様がオカムリになると困るので、そろそろ行くことにした。

「じゃあな、本城。元気で」

「お前もな。今から神楽坂に会うのか？神楽坂にもよろしくって言うといってくれよ」

「わかった」

俺が走り出そうと、一歩踏み出した時、突然本城が俺を呼び止めた。

「東原！」

「な、なんだよ。驚かせるなよ」

「急いでるとこ悪い。あのさ・・・今思い出したんだけど・・・」

口ごもる本城。

「なんだよ、らしくないな」

「東原が前付き合ってた女って・・・」

「前付き合ってた女？どれのことだ？」

「・・・どんだけいるんだよ。神楽坂の前に付き合ってた女」

「ああ。愛か。間宮財閥のお嬢様」

本城が、げっ！という顔をする。

「なんだよ。愛がどうかしたのか？」

「・・・」

「・・・お前、もしかして・・・」

「いや、なんか成り行きでそうなってさ・・・」

「や、やめとけ！愛はやめといた方がいいぞ！」

「なに、まだ未練あんの？」

「そうじゃなくて！」

あの愛だぞ！

いくら本城でも相手が悪い！

「悪いことは言わないからやめとけ。遊ばれて捨てられるだけだ」

「俺、一応本気なんだけど」

「本城が本気でも、愛が男に本気になることなんてないって！」

第一お前、普通の女と付き合ったり結婚したりはしないって言うてただろ」

「普通の女？愛が？あんな肝っ玉の据わった女、見たことないぞ」

「・・・確かに」

本城と愛、か。

2人が並んだところを想像してみる。

見た目にはお似合いだ。

うーん、でも愛、だぞ。

俺は完全に持て余してたけど、本城なら・・・どうだろうか。

「それにしても、萌加の次は愛かよ。本城も面食いだな」

「東原こそ、愛の次に神楽坂だろ。人のこと言えるか」

「・・・」

「・・・」

何、同じ女の間を歩き来してるんだ。

俺達はげんなりしてしまい、そのまま別れた。

「遅い！遅すぎる！30分も遅刻！！」

「あー・・・悪い」

俺は萌加の顔をまじまじと見た。

「何？」

「いや、やっぱりかわいいなーと思って」

愛も。

「え？」

俺の心の声はもちろん聞こえない萌加は嬉しそうに怒った（？）。

「そんなこと言っても許さないから！何してたのよ！」

「そこで本城とばったり会ってさ」

「え？本城？」

とたんに萌加の機嫌が直る。
おいおい。

「あいつ、H大受かったって」

「H大！？すごい！」

萌加が俺の腕を掴んでピョンピョンと跳ねた。

「うわあ！将来、官僚にでもなるのかな？」
「・・・」

官僚のヤクザ。
それはないだろう。

「ねえ、まだ本城いるかな？お祝い言いたい」
「ああ、駅に向かって歩いてたぞ」
「ちよっと待ってて！」

そう言うと、萌加は一目散に駅に向かって走って行った。
よくまあヒールであんな早く走れるもんだ。
女は強い。

つて、強すぎだろ。

彼氏をほったらかして、昔好きだった男のどこに行くか？普通。

やれやれ。

俺は苦笑いしながら、ベンチに腰を下ろした。

|
「
q
u
a
r
t
e
t
」
完
|

第28話 龍聖 「2年後」(後書き)

「quartet」を最後まで読んで頂き、本当にありがとうございます。

今のタロウの気持ちは・・・「終わった！」です。

当初、気軽に「4人の視点からの物語なんて面白そうじゃない」と書き始めたものの、

4人の視点、ということとは、4つの物語があるということとで、それぞれそれなりに起承転結を作らないといけないという訳で・・・死ぬかと思いました。

「終わらないんじゃない!?」と本気で心配になりました。

が。なんとか終わることができました。

ひとえに、読んで下さっている皆様のお陰です。

本当にありがとうございます。

さて、タロウの某小説をお読みの方は、途中から「quartet」本編そっちのけで、

月島姉に何があったのが、気になると思います(笑)

そちらは、これから始まる新連載の方でお楽しみ下さい。

また、サブキャラの間宮愛には、実は隠された秘密があります。

一体本城との間に何があったのか・・・

気になる方は、完結済みの「SECOND LOVE」をお読み頂ければと思います。

また、「quartet」の中で1人、「起承転」はあったものの「結」がなかった奴がいますね。その登場人物をメインにした「FIRST LOVE」という題名のお話を現在準備中です。

連載はまだだいぶ先になると思いますが、よろしければそちらもど
うぞ。

お付き合い頂き、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0801/>

quartet

2010年10月12日16時51分発行